

ル 3
3261
3



門ル呂
號 239
卷 2



目録

木曾路名所圖會卷之二

目録

- 寝物語里 ねものがたり
- 妙應寺 めうおうじ
- 常盤津茶屋 とこひら
- 不破關 ふたけ
- 關ヶ原 せきがはら
- 因系市身跡 いんけい
- 班女旧蹟 ばんにょ
- 美濃中山 みののなかやま
- 南宮金山表神社 みなみや
- 勅使殿 ちうし
- 龍飛御宮 りゆうひ
- 藤原御宮 ふじわら
- 和射見野 わさみ
- 青坂祠 あおさか
- 黃鳥殿 わうちう
- 戸佐々宮 とささ
- 美濃中道 みののなかつち
- 天武天皇行宮 てんむ
- 野上里 ののじ
- 不破頓宮 ふたけ
- 藤原御堂 ふじわら
- 車返坂 くるまがへ
- 親善聖人旧跡 おんぜん
- 大右吉隆塚 だいご
- 月見祠 つきみ
- 竹中重治城址 たけなか
- 桃賦 もも
- 垂井 たれい
- 垂井頓宮 たれい
- 十禅師社 じゆぜん
- 南大社 みなみ
- 本地堂 ほんち
- 釋迦堂 しやくぢやう
- 稻荷祠 いなり
- 今頃 いまころ
- 黒血川 くろち
- 開藤川 ひらふぢ
- 不破光治若 ふたけ
- 首塚 くび
- 伊富貴神社 いふぎ
- 垂井清水 たれい
- 民安庵寺 たみやす
- 高山右衛門 たかやま
- 元三大作堂 もと
- 藥師堂 やくし
- 山王祠 やま

門ル 3
號 3261
卷 3

氏神祠
神祠
子孫祠
千手観音
神明作
地蔵堂
船也
空也
幸也
美濃御山
相川
國分寺
御勝山
金生山
呂久川
結祠
名産甜瓜

養老滝
五層石塔
大領神社
天満宮
神明代
金敷金
荒神祠
養老滝
金蓮寺
養老山
青墓里
甲塚
寝費里
後光嚴院帝小嶋頓宮
美江寺
谷汲観音

中殿高山祠
高末社
十八末社
松下祠
七之宮
國府宮
南宮
養老祠
春王九墓
安王九墓
青野ヶ原
小篠竹塚
赤坂
杭瀬川
系貫川
美江庵寺

十面観音
衣裳堂
十玉堂
活湯所
日目上人茶毘所
幣掛松
朝長墓
子安祠
笠縫里
乙津寺
自然居士墓
席田

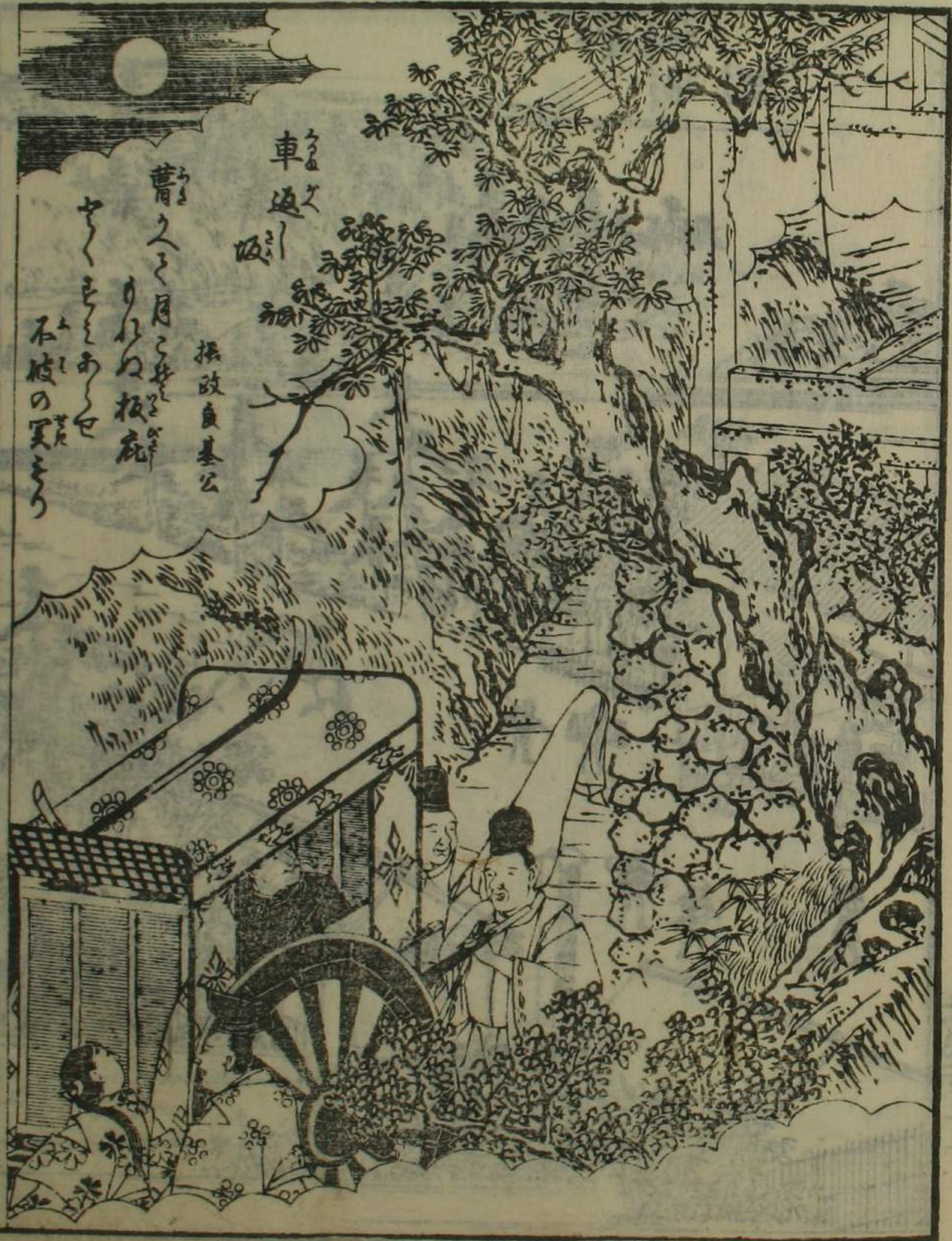
本居二目録

船本山
岐阜
長柄川
天神社
比奈守神社
御井神社
村國神社
岐嶺川
名産美濃紙
伏見
可兒薬師
泳宮
永保寺

河渡
稲葉山城
鶴飼圖
往來松
新加納
各勢野
鵜沼
太田
太田門
在原行平塚
關魔堂
和泉式部墓
平峯

河渡川
稲葉山
岩田小野
瑞龍寺
飛鳥田神社
針綱神社
帷子山
名製園鍛冶
懸主神社
鬼首塚
阿弥陀堂
護摩堂
鬼岩窟
細久手

乙津寺
因幡神社
加納
苗部神社
加佐美神社
例祭録の圖
岩窟観音
名産蜂屋柿
金山古城
御嶽
庚申堂
一吞清水
月若日吉里



車返り
 菅久三
 板底
 板底の更さる
 板底の更さる

木曾路名所圖會卷之二目錄終

- 琵琶嶺
- 竈山
- 西行硯池
- 根津甚平墓
- 中川神社
- 大井
- 坂中
- 惠奈神社
- 伊勢參宮別道
- 母衣岩
- 鳥帽子岩
- 七幸松
- 大嶽
- 中津川
- 落合靈社
- 八幡宮
- 與坂番所
- 西行墳
- 大井橋



籬島

天下
 寝の
 帳牛
 心



里
 物語
 寝

車

木
 二
 一

木曾路名所圖會卷之二

寢物語里

こゝに近は英徳の國境なり長久寺村小ありむし

たふらふとふ

は里小義經の愛妻静は因縁を遠く

右見

右見とくは近は英徳ふらふとふ

右見とくは近は英徳ふらふとふ

右見とくは近は英徳ふらふとふ

和射見野

今此地名派鴨澤

天武天皇大友皇子に襲はれは島市王子陣營不行幸

一人幸日幸紀見

万葉

真木立不破山越而狗劍和射見乃

原乃行宮尔安母理座而天下

吾妹子之笠借手乃和射見野尔吾

者入跡妹尔吉乞

同

本卷二二

夫木

同

真木立不破山越而狗劍和射見乃

原乃行宮尔安母理座而天下

吾妹子之笠借手乃和射見野尔吾

者入跡妹尔吉乞

者入跡妹尔吉乞

者入跡妹尔吉乞

者入跡妹尔吉乞

者入跡妹尔吉乞

者入跡妹尔吉乞

者入跡妹尔吉乞

者入跡妹尔吉乞

者入跡妹尔吉乞

者入跡妹尔吉乞

者入跡妹尔吉乞

者入跡妹尔吉乞

者入跡妹尔吉乞

車返坂

長久寺の東二所許あり

長久寺の東二所許あり

長久寺の東二所許あり

長久寺の東二所許あり

長久寺の東二所許あり

長久寺の東二所許あり

長久寺の東二所許あり

長久寺の東二所許あり

今須
濃

関ヶ原まで一里ひくく居益中書一之は宿東の端小
居益塔下中より坂より降と和宗之又訓と手向せり
幸なり嶺もろ多く神社あまは手向て通る湯と

後川記

一丈関小あつればあまをたぐさき所とるる

妙應寺

今須の宿中妙應寺の東にあり青坂と号し曹洞宗西興
僧熱湯なり寺鎮二十石用山の道元禪師の二世我山和
尚奉願とむり今須の城主長八郎左衛門重宗の母喜
提の宿小建立あり今伏見宮御願所とす

青坂祠

宿の東妙應寺の例あり妙應寺の御守なり宗神孫倉
権五郎景政を重宗の祖父秀宗と兼久の礼後小
あり土蔵小廟一は祠を建す

親鸞聖人齋跡

今須の東花来村聖蓮寺とす
東報願寺の寺小あり

桂本

聖人住居の極の御願所なり
聖人住居の極の御願所なり

黒血川

今須の東山中村の川の方の流をり
川幅いと狭し

富士紀行

多しとく見れば名を黒血川とるは流の東より

竟考

本巻二三

後川記

黒血の橋とるる所を

太平記

白波と岩此岩根のれとも黒血の橋の名をせり

兼良公

はくば対別と移さば白と大將軍及高城後守降泰月援慶守降を細
川刑部を頼頼春依と本判友成頼依と本依判友入道乃登子貞辺に
守秀徳以外諸國の大名五十三人於合其勢を万好勝二月四日於と
は六日の早且本辺にと秀徳の場なる黒血川も是に乃奥勢も橋井赤坂
母をぬや聞なれをうとくお徳屋しやてあまの夜川を危く後
ち黒血川をあて其間小陣成ぞ取つりける作しありへり今に
勇士猛將の陣成取と勢と侍川成後と山より流る水成とす
こ勢ある今大河と後小あて陣と取と進る幸と赤一の兵法ある
むく漢の高祖と楚の項羽を天下成幸八々幸が同戦小更止と
けふあ耐高祖軍小きけく進る幸三十里討破されたるを
三子孫勝も足ざり及項羽に十将万騎成をのこれを退ひたる其日
既不善ぬ夜明は漢の陣へ押上々々高祖を一時小亡さん更明とす

常盤墓



此ありとせし勇乃其友小高祖の臣小韓信とらひ兵大將小ありて陣と
 取らせり小韓信のどせや小大河をあて橋は焼たれし舟と打破せせ
 持てりけるこ終と述も免るまじた所を知り士率一引も引かみか
 討死せよせよ小さん物の謀なり夜明けは項羽の臣十萬騎ありて
 欲は小勢なりや悔く我を即討小せんと其勢繁然とて左右と顧
 みるるは韓信が兵二千餘騎一足も引も死とありて小親ひなるは小項
 羽忽ち小うち肩く討て去せ万人逆るは逆更六十餘里あり泥をさひ
 泥を隔ててこせとて欲ともかふを得しは橋は引くせを長たりける
 漢の兵勝小素と今青屋をて項羽の陣へ客んとけりは韓信兵を
 あり先とやなるは赤思ふ屋う有汝等みか持とこ所の云糧と棄て其
 囊小砂と入と抱べしとせ下知しけは兵となぬね幸うかといひか
 大將の命に應と士率みか持所の糧系と持て其袋小砂と入と項羽が
 陣へせ押とせとる教と入と項羽が陣の糧をさる小は方留泥成とらひ

以城隔之馬の足も立に渡る極力と祈りて陣取らるるは時韓信
 持せしる所の砂囊は泥小投入れくを獲るに於て其上城に下る小
 泥さるる平地の如く項羽の兵二十万騎終日の軍兵は是れを
 敵寄るに道取しを許りて常細さく寝る所は高祖の兵七
 万騎圍をぞりては之れを押せりて一戦も及ばず項羽の兵十
 万騎をみか河にばはさく討たしるは是と名付く韓信が囊砂背水の獲と
 之甲あり今昨春昨を頼春が款張大勢力ありを聞き口ごとく必
 背小形して國の藤川小陣を取らるる専士率の公成を以て海
 韓信が計張るは是の如く去程小國司が家郷の勢十萬騎室井赤
 坂青野が原を充滿して東西六里南小三里小陣を張り
 常盤御茶墓 今頃の東山中村のわが民家の傍にありて石塔三基あり
 其徒者の塚あり人欠一説小常盤騎河守が墓と云ふ
 義朝のまゝ海小形より杖の風
 黄鳥 川上を去る警隊の東の方にかがれ
 それより西にむく影の蹤みある

本居二ノ五

家集

梅ヶ香の下り水の便をこそせられき乃れ嘗てかみ

家隆

大谷刑部少輔吉隆塚

山中村左の方乃か下小あり
長尾村松尾村の西に建る

開藤川

松尾村西小あり水係伊吹山の麓より流るる如く
東流り松尾村の西に流るる如く
より勢別表名不入る備ふこれを

古今

美濃國國の長川をさして若くは之ん上河代也

大秋所

風雅

神代より通ある國小流之乃流ちりりもたれぬ実の長川

光明峯
入道

後古今

美代小流之も是む月とる成をさくむる國乃長川

定家

後後述

を先く一國の藤川をさても流るる小下むむひつ

定家

日

はくく一代之のまを思ふ小中我身小頼む實の長河

若原西兼
木大納言
実家

新後述

いふせん開は長河等と終く仕下り流るるれをのこさ

大政大臣

日

ひあのおられとてはくく一國の長河

為世

後千

流るるをさくく一國の長河

右大臣

千載

忘るるか世にまこく若くは流るる乃のせの長川

日

頼むとよせられた藤河未までも母のふくむと若くすむく

一条因又臣

日

はくねいむむうへりおれた世の中は志のつとむに罪れらる

後人よるん

日

救うぬせられた藤河の船をのりたそあ世ははたし

修下至平

可枕

ふら河の瀬瀬もよるに持てて後の神代好しはふく罪

好古

名寄

雪分るゆらと浮吹のふ風ふ駒うらふさむ圃のゆら川

秀能

日

こてもれ志の中思名とやそめはしゆの瀬瀬の雲の藤河

二条因白
良基

建保百首

吹とそく風と浮吹のふそる踏とそそく物とせられたふら河

藤光

日

春の嵐はそる浮吹のふそら花をのらすか雲の藤河

能頼

聖王

決えくく程と雲井の伐とそそく處をそそくせとのふら河

内大臣
実隆

新後鳥羽

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

中院通村

十六夜日記

十八日みの國小園の藤河のつら程本ま川ありひはゆら河

阿佛

藤河記

我らとそそくあまふはふらふらあふてつらはゆら河の藤河

藤河記

母の君おか一流の流の流れてそそく藤河代替るせられた藤河

一条兼光

母の君おか一流の流の流れてそそく藤河代替るせられた藤河

日

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

大中宮親守

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

攝政
大政大臣

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

佳実

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

源頼康

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

藤原清隆

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

藤原公成

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

藤原朝光

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

藤原朝光

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

藤原朝光

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

藤原朝光

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

藤原朝光

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

藤原朝光

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

藤原朝光

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

藤原朝光

あまぬれたのそそくもあまふ法をそそくせとこれふら河

藤原朝光

日

不破乃や万石をらりて梢より嵐波をたぬ国守りりぬ

隆信

後松川百首

東路の不破の冥途乃於虫成ひすやふゆりやありひたつな

仲実

文本

ぬる里のふの中心目たれく冥途よりとたれをせりく

光俊

いさふち

不破の園屋を板びとていひてきんらてくさるなり

河井

光り記汗

御戸御月をゆりて冥途をさの程ありぬも月まのつちを後

柏原

とくづは嵐松を木むとていひて美濃國をゆりてさる川きわのうさふ

あそれふむりてく越えくは不破乃罪屋より茅屋の板びとていひ

よふ歩の人ふ奇を死出くはくけく人をも風情をまらぬとてはれぬ

さこそこの景派のこころもあつくふゆりてくさるはあつくさる

山中とていひてあそく

美川記

郭をさのつみ月の山中にありてくさるはあつくさる

兼良公

本巻二七

関藤川
不破古用

不破の冥途

目打

月見

如り

旅人や

向う合

不破の月

本図



不破の關原を足つるに何せれむし一物喜れ之中津門
振改乃何まし一後をたけ秋の風せ涼ゆひ一幸なりこれありせ
られて

あまのふ不破の宮の板庇にうらもふさめなる事 全

戸佐々宮 尾川の東岸上の南津邊の傍にあり

祭神 天武帝の靈を魂を侍 美濃神名記に因比男明神

むし一清見天皇を東宮のうらを侍し一吉聖心ふ入るひ一ひも
おゆし一しし一と大友の王子に發せし一とたふふふのれ
物一伊賀守勢比國を治る美濃の郡上は行宮と云れし一幸を
日中紀方とふと一ゆきせし一幸遠まあるれを宮の嘉福寺と
たしふとる人は育ぐとかえし一今もまうわらふ乃船中ゆめ
かし道ふまわると見え

阿ますれち郡上の美濃くまの治もいんかつせり

柔良公

本巻二ノ八

月見祠

この中の松尾村の南西の山中にあり春日の神を奉る美濃の中津の傍にあり

不破河内守光治若

松尾村の南にありは光治と稱す藤原氏の臣なり

關ヶ原

壘井中一里宿中八幡宮の祠ありは石の生土神と
は祠の側より若狭越前へ通る北國街道なり

遠近抄

美濃中道

國ヶ原駅中より牧田へは通なり石標と建ふこれを牧田街道と云ふ

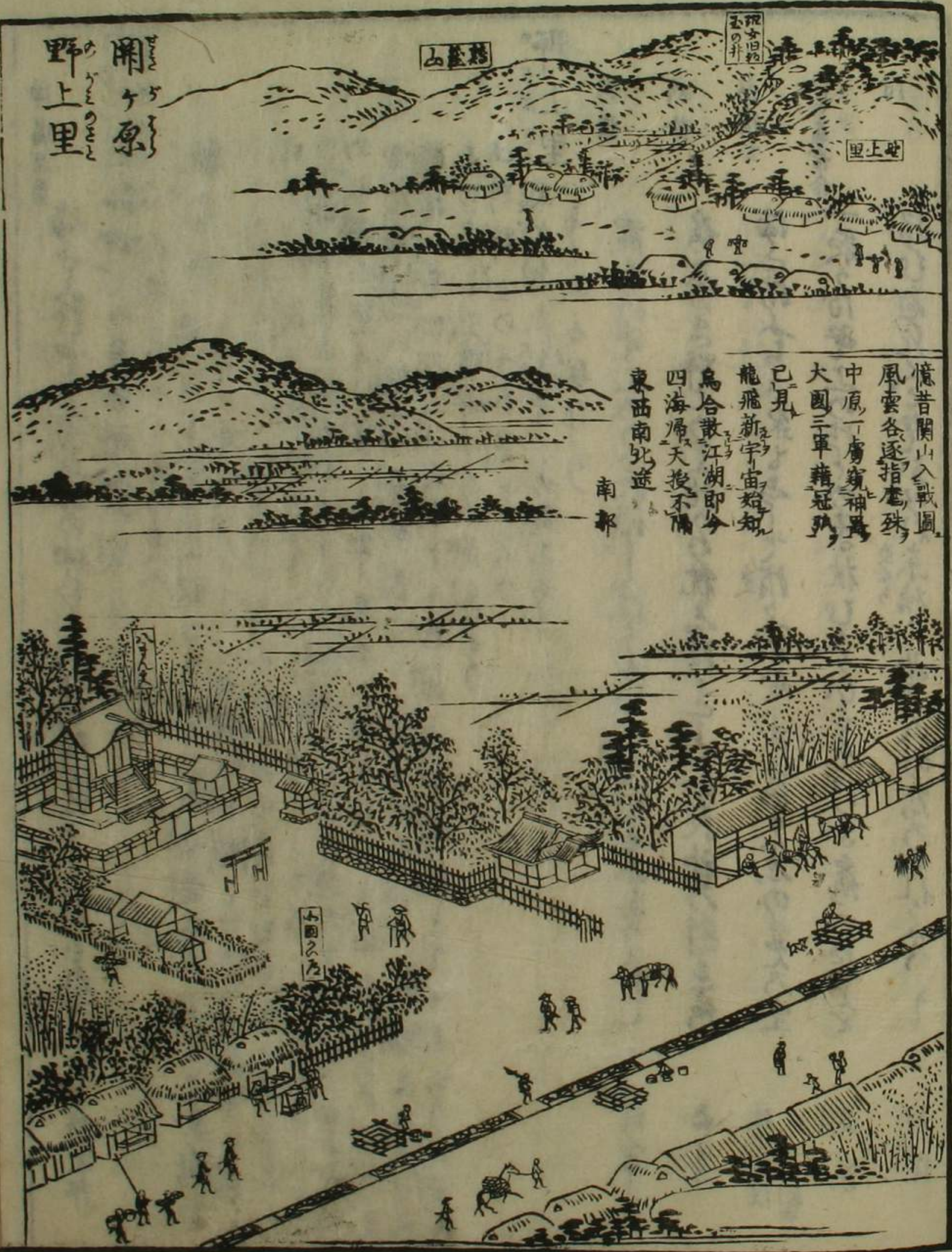
梓弓

竹中半兵衛尉重治城跡

國ヶ原の方磐石山の奥小菩提村と云ふ所なり

首塚

軍師の嘉徳寺にあり



億昔開山入戰國
 風雲各逐指鹿殊
 中原一虜窺神異
 大國三軍藉冠佩
 已見
 龍飛新宇宙始知
 烏合散江湖即今
 四海隔天投不隔
 東南西北逆
 南部

毛ゆる火電見まは茶葉れりつるかま 蘇島
 閑原與市屋敷址 水と蹴上し人なり其子樋口大房丸とつは子孫

天武天皇行宮 野上村の西に遷右の方 山間の平地をりよ又慶長五
 年九月十五日 天武天皇行宮 桃賦 六月ころふりきりてし

天皇於茲行宮興野上而居焉此夜雷電
 雨甚則天皇祈之日天神地祇扶朕者雷
 雨息矣言訖即雷雨止之戊子天皇往於
 和豐檢校軍事而還己丑天皇往和豐命
 高市皇子 號令軍衆天皇亦還于野上而
 居之

伊富岐神社 延喜式不攸郡三座の内之
 祭神 鸕鷀草葺不合尊 鳥居 額 伊富貴大明神
 日本紀云

神通百首

ほろむむせりよまはの神あはれも契りこころわされ

上杉兼邦

班女奮蹟

野上の南郷麓の麓

野上をり野上の長者あはれこころ小籠子

親音堂

遊女あり一夜の契とむまは又堂よまの

少将小籠子退し曲小籠子其外班女の画衛吉田の少将

堂の御持一室切の尺八又山上小籠子千和松とて右木あり又堂の

野上里 野上の長者第中あり

新拾

霞の神上のうにけりげうのひを鳴のまふあり

新撰

霧志けの野上の里北われ枕志ほましく物神乃別は霧

六首集

一敷の野上のほのま枕むをひとてけふ霧の契と

日

ねむる人をもふれ東路の神うみの宿のれこのや

一字抄

いそまふ神上の里成色の人衆ゆるく園の書うあふり

家集

うちまふ野上の里まをを見くかへりふを渡さるる

夫本

不破乃山船越ゆけをまふり野上乃のうさうさひをせ

新後明題

むきてり名流試むむま系枕神の里北のひ契と

垂井

赤坂あざく一里十二町野中東西六七町許お針して巷

南宮の大鳥居あり

なん其峰散在はけ意都會の地ありて高人ま一宿中に

垂井清水

南宮の宿玉殿寺とらふ

詞花

むく見たるお水いさし神と結まうの七奉とほふ

夫本

我袖乃志のうさうさひまひまはなふ安はあらす

後士紀り

昔見しれを志はる小はるまはれり垂井の水成法とむ

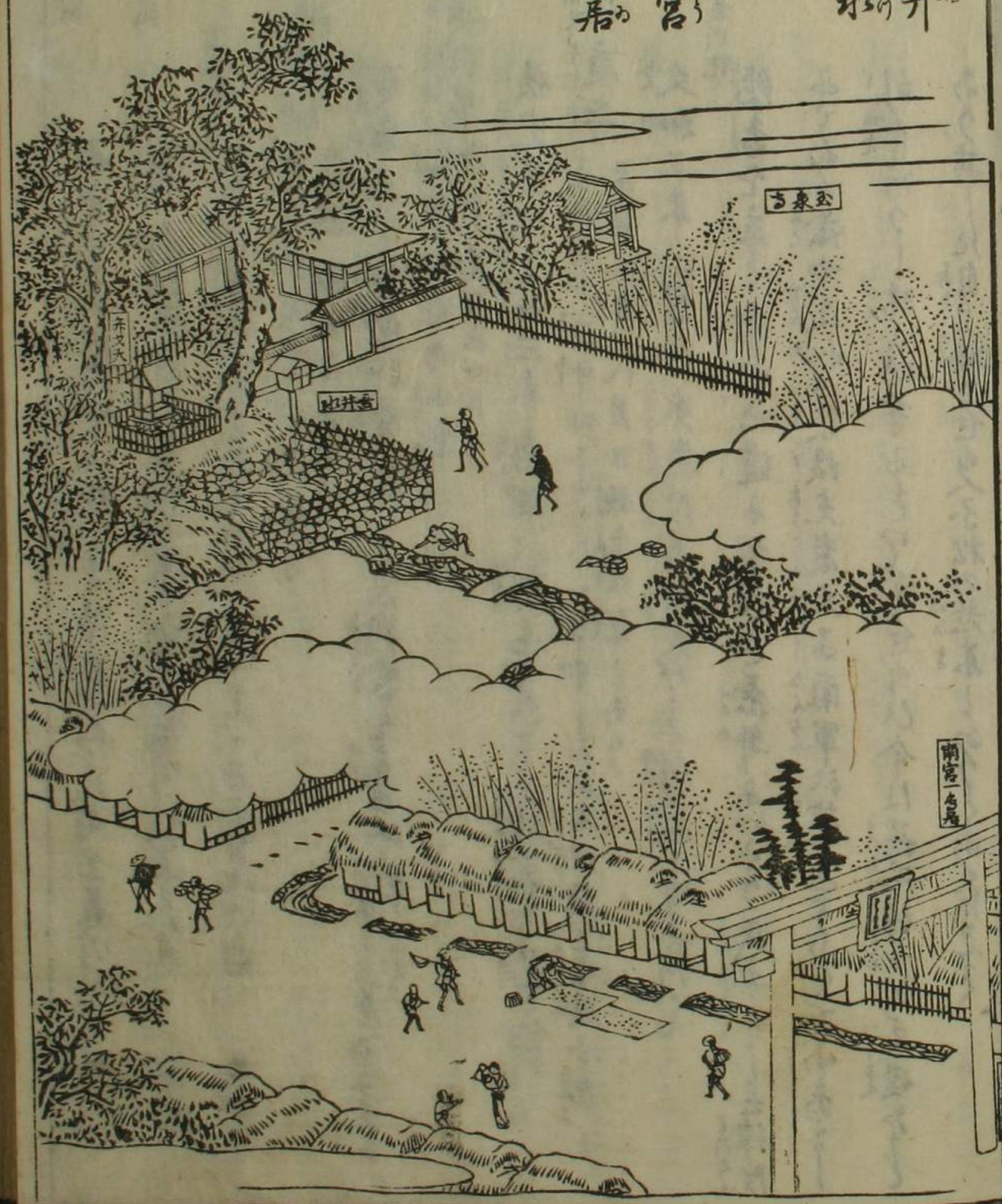
長川記

むくれびく形はけとほ小遊女りせあふり一りやと杜牧の

珠簾十里揚列路といふ事成るひあふり人ゆり

本名二十

清水の井
南宮
一鳥居



あささふくはあけそまきつれまの三河よ社まふん
兼良公
は清水の特は清冷ありて味は甘く寒暑小増減ありゆきやん人
湯気志のぐに足まら漬くそは清涼く似たりと梅聖念が詩乃

よるはみ道

美濃中山
南宮の中山とていふは中山の山

後拾

後拾

後拾

後拾

日

日

日

後拾

色くもれ美濃の中山杖えりてまきさるる逢坂の関
けえりみの中はるる川も志のねをそ世國の着川
都をけそねさともり久し見そ実そえりぬる美濃の中山
みの國不彼の中山もさるるぬふ水かん甘れの辰川
里はれ柴乃さるるささ道もこくさ不破の中山
言まふ園庭の杖乃下くけふさるる清くぬを中一山
やし清く松かん本はよ駒をたて夕立さるる不破乃中や
物も雪はるる中山うらもひ紙もや君とねる一山小

定家

兼良公

中務親王

為相

中務親王

日

二条宰相

日

取ふるる長流乃中山越るくゆに社ぬに関を長川

日

日

ふつふつ我身あつては不彼の心香不報の心志をん

日

一字序抄

越前七部を定りぬたのやま松くくふ小育の月

後柏木院

不破頓宮

密葬の南今所遊と

聖武天皇修勢行幸の時こ小行宮をまひ

天平十二年續日本紀

垂井頓宮

密葬の密乃小敷

後光教院文和三年南軍に勝進をひこ小行宮を建ゆ所と

民安慶寺

垂井の小府中村小あり今所遊と

文和三年六月後光教院乃帝志くくり文乃所と

長川記

徳教をまきくをせの道小ありひこ垂井小あり民安寺と云律院

みりゆる強や文和の頃後光教天子南軍に勝進をまきくして小あり

切寺あり一は寺ありてせのひ今は其強り文乃不礎たど

あり其とれ自ら極させの久松の老本とありてある所と

五本二ノ上

太平記

世よありて天の御心たてし民安くまやうえしとあり

義詮朝臣と兼く依り本秀綱を登り固小備は東坂平村幸く海安く

くくく固くの勢とも修せんといひせられり吉野殿より大長院の法印

大將の若小門へ入りてをりて沙汰しける間坂本とありてふされん幸

悪う子へて六月十三日義詮朝臣龍鷹を守護しとありて東近江

の方へ入りて行幸の儀をまひ二條の関白左大臣三條の大納言實隆西園

寺大納言實俊裏過大納言忠秀松及大納言忠綱大炊御門中納言家信

四象中納言隆持菊亭中納言公直花山院中納言兼定左大臣辨俊右大

辨経方左中辨時光勳解由次官ゆれ加梶井二品親王子即ちせありて

出世坊官一人も沙くん石具せられ龍鷹の儀をよ所興をまひらる武士

母の足利宰相中將義詮を大將して細川相模守清氏尾張氏部少輔

舎弟左京権右左衛門右邊將監今川駿河守頼貞同兵部大輔祐時同右邊

藏人土岐大膳左史頼康慈治備中守直道依り赤山内入部左衛門信詮

これより張宗茂のつとめて於合其勢三子孫驍和赤雲岡の漢道小駒城を先
て我を為らざるを不敵城に兵衛守貞満の子息掃部助貞祐に以て本年豊岡
小原を以て居るをけるが其辺の邊者どもを以てひく六百餘人まがの浦に
出合て居り敵を討るんとすつた其主上を擁護しきて提督二品
親王清門流の大衆集りて石具して居るを以て門主小公を主とす
弓とひ守矢を以てかたは同坂中の整固して居るを以て本辺に守
秀綱三百餘騎もく遠の後陣に通るるが此を以て山門の敵討の侍所
うねるるを以て討止ししては兵五百餘人来るより引色んが足軽の射
手小原ひ沢を以て隔てんとく小射る同佐本三郎左衛門兼浦次左衛
守因八郎左衛門今村五郎一所もくみか討たふなり秀綱を頼と切る一族
も意たが流し踏止し討死しけるを見く公夏幸子も思ひ及ん高尾四郎
左衛門入道と二騎馬の鼻引引きて敵の中へけり共よ歩之の敵馬の
を以てむとがわく居る所を討たふれを遠く居延くる若堂元世七人

及一合せし所を以て討たふなり其衆を以て強要を以て止先きて供
奉の人々も少く休先も人々やせ我らも居津海津の地下に軍勢も小
一疾も遅るせば幸少くもかひ育人しやるひなるるれ道はかこの是
よ取よくかひ育人し時を以てける程ふるの所遅るも多るを主上より
豫興よ先されし事も早進しとて奮興丁もみか進ませく一人もあられは
細川相模守法成馬より死するを以てあざら小あり獲の上小主上貞貞に
て治休の心なぞ越えられ多子推し腹の肉を切道宿が車れ行輪と助しは
忠めりてとせんと月卿雲容或る長汀の月小鞭とあげ或る曲浦ま
浪本棹さうの久を巴格一ふひ叫ぶ船とぬ月使の色小まむ胡馬忽小嘶く
踏を美沙候のうらふ先ふと古人の書一征路の篇も今こそ心なされり
これより以て路次の煩ひもあつりく公夏濃の垂舟の宿乃長者が家と
皇居ありて義詮朝臣以下の官軍みかには色に在家小宿張る所を以て
を守護しなるる

仲山金山彦神社 報喜式内大 名神英波國一宮と称れ
正一位 勳一等 仲山金山彦太神と称れ
神道百首

祭神 五座 金山彦令 見野 命 網委女令 二座秘神と云

續日本後紀

仁明天皇承和三年十一月美濃國不破郡仲山金山彦

太神奉授從五位下 則預名神

承和十三年五月奉授美濃國不破郡中山金山彦神

正五位下

三代實錄

清和天皇貞觀元年乙卯春正月廿七日美濃國仲山金

山彦神授正三位 同貞觀六年五月廿二日金山彦神

授從二位 同貞觀十五年四月五日金山彦神授正二位

社説云

神武天皇元年鎮坐當國府中又崇神天皇五年十一月中

子日遷座中山麓又天武天皇壬申騷擾時行幸又朱雀

天皇天慶三年平將門叛逆時詔祈誓神功最掲被授勳

本卷二十四

一等 後冷泉院康平年中安倍貞任宗任亂亦有靈驗
被授正一位

南宮攝社

十禪師社 二宮と称れ本社の北にあり

高山太神 三宮と称れ本社の南にあり

隼人祠 二宮と称れ本社の北にあり

南大神 五宮と称れ本社の南にあり

七王子祠 七座 大山祇 中山祇 兼山祇 籬山祇

勅使殿 本社の小

護摩堂 長日天下 安全淨地 禱と稱れ

本地堂 無量壽佛 勝軍地藏 多門天 十一面觀音 不動尊を安ん

右瑞垣の肉小あり 元三大師堂 天喜年中

龍飛將軍家御宮あり 三重塔あり 釋迦堂あり

藥師堂 延暦十二年 基奉す 本

落合社 系神 素盞鳥尊 相殿五座 平將門調伏の付勅命小

忽ち靈應あり 座あり

胡千害祠 豊王奉命 稲荷祠 宇賀 鬼命

山王祠 日吉七社 氏神祠 系神 直日神 二座

荒神祠 伏して築こめ 又將門降伏の供器をくみぬむ

中殿高山祠 數之祠 系神 塔去巻

辨財天社

金敷金床社 祠中絶

高山宮 山上奥隈より登る 奉十八町

隼人社 神体 奉小日

子泰社 保食神 伊弉册 尊 御子 安産を伺ふ

神明宮 山上小あり 系神 奉 御子 安産を伺ふ

十八末社 神号 奉 御子 安産を伺ふ

春日 天満宮 富士 諏訪 愛宕 多賀 三輪

十一面観音堂 山上高山宮 奉 御子 安産を伺ふ

千手観音堂 子安社 奉 御子 安産を伺ふ

神田代社 奉 御子 安産を伺ふ

松下社 奉 御子 安産を伺ふ

衣裳堂神社 奉 御子 安産を伺ふ

大正十年 奉 御子 安産を伺ふ

神明治社 奉 御子 安産を伺ふ



南宮金山彦神社

山中渡頭

山一古原
八丁

本巻の二十六



南宮
奥の社

天満宮

仕頭小あり

七之宮

大門通小あり
甲吉山王と東内
宮の入口

十王堂

小あり

地藏堂

日所小あり

大領神社

日村の内小あり式内なり
系神伊弉册尊速玉男事解男

國府宮

日郡府中村小あり
系神金山媛神壇山姫今豊玉姫尊

首社

日郡荒尾村南宮より六十町あり
平将門の霊成系不守生祠ともいふ

神本白玉椿

神本にあり

勅許遺

吳渡山の白玉椿よりう豊の明小ありをいけん

徒二佳行能

南宮十首

色久ぬき玉椿みの山小神や八子代乃きとてふ舞

利綱

鐘

高サ八尺三寸 巨三尺三寸 厚サ三寸八分 無銘
ひり金井駅の南東の中 盆池より出る信託宮よりうり

右二七

狛犬 狛門の守護
 石鳥居額 正一位中山金山彦太神と書れ
 鐵塔 南蠻造り



如法經と書字一は塔
 中の洞心幸あり
 永正年中近引之
 其後中絶

上重子朝日
 晦日テ記シ
 梵字アリ

下耳 三尺二寸
 上ハ菩薩六辨
 下ハ天王ノ像アリ

平氏能登入道沙弥淨普

平氏左京亮氏仲

土岐美濃守源朝臣法名常保

土岐刑部少輔源朝臣頼世

法名真兼

右兵衛太夫秀行

藤原散位秀顯

新銘
 是應永年中

再建修補大檀越
 右兵衛太夫秀行再興之時
 奉行ト云

源盛光 沙弥道順

勸進聖 沙弥淨阿弥

沙弥妙全

大工河内國高大路家久

應永五年 戊寅八月十日 敬白

空也上人和歌碑 社の後小あり或説云は秋と遊修一上人法灯圓照小

唱れと佛を我とるる南無阿弥陀佛

此社之社の前此を唱るは虚空より感動の聲ありて
 止れおふは奇蹟なりと云ふ事又六字名号ありて
 二年卯月日遊修才二世真教上人之に建付
 五重石塔婆 塔の南にあり 銘曰一切藏經刻轉供養也
 文明已亥比丘妙先拜首

年中行事 神夏祭禮

元朝 大宮橋社外上列
 奉地堂 三朝之間修心會

日 大宮攝社淨節會神事

正月十七日 步射神事

二月八日 牛王供

三月三日 二宮三宮神樂前後の儀あり
馬場後淨末後三夜の神事

五月五日 大宮二宮三宮神樂淨旅新國府宮神幸

六月廿一日 淨田植

日 此日 夏越後

七月朔日 一七日本地堂小旅々法華讀誦修行

日 七日 大宮并本地堂開扉寶物出掛

八月十五日 秋山神交神前左右以芝飾山移明月獻神供

十月上旬日 淨鎮座祭祀

日 晦日 大宮開扉法華會

十二月廿七日 淨煤掃之神事

正五九月十五日 大般若經系詣千度 神樂

日 十一日 本地堂護摩堂修法

日 十七日 宗源三壇修行

正四八十月 每十一日ヨリ十四日迄三座宛寺宜勤行
十一日系詣千度神樂修行

神事祭禮神供調進魚鳥獻之

其外月次神事畧之

神社考云

南宮山神者天武天皇自鳳之初所建祭

也其華表題曰正一位勳一等金山彦大

神金山彦者何神余答曰日本紀神代卷

所謂伊弉册尊將生火神悶熱懊惱而吐

即化為神號之金山彦是也此神於五行

為金神於是乎其人又言曰初美濃國不

破郡府中祭之後移于郡之南仲山故號



南宮
祭禮列式

おるニ二十

南宮祭祀供魚鳥凡產于美濃者必以南宮為氏神云余復告曰天武天皇自吉野經伊勢入美濃塞不破關遂擊大友皇子蓋於此時有所祈美濃中山而後建神祠耶其人答曰彼社家者亦云余復詰問之答曰朝敵平將門頸傳言飛入洛時神放矢射其頭今俗稱箭路御首宮者是其緣也

住吉明達天慶三年正月於美濃山南神宮寺修四天王法降將門二月十三日午時赤雲自東來入爐壇須臾臭氣盈場十四日將門伏誅

夫當社於南宮也極其奉奉を謹火南方を司とる故ふりて辨ふり

陽神ありて文武兼備ふ故小國宗崇る以或と世の騷擾乃附す希あり幸ありてびるり所習天武朱雀の朝小は沛神功法を國に施し終に慶長の礼を報族安國寺に小陣に此を盛拂ひたり其店大猷院公の沛附今此れを速く歩再營ありたり珍跋と社頭例祭と三月三日神樂演沛又五月五日も府中村の沛所小り六月廿日沛田極乃神又十一月初申日の神祭也の神供も奠物法用也又當社の神寶小大織冠鎌の圖あり其飛行藻の滄北と當宮ありて今の地所小奉社あり實水以來山下に遷座ある奉社の前も釣殿お殿舞殿樓門左右監督長石反橋橋神樂殿沛供所神庫神樂舍社僧集會所社人十二人社僧十二坊其外生去の面々迎隣ふ多し陰晴は嫌はる

兼川記
安小國一宮と稱する所ふべし
五日の申乃時より小橋并り宿小是り小南宮のありて足物也

てとがう物さぐくならさぬよひなり風流の山笠などあるよや
昔のめくあははは所本遊女などりへ〜又折ふあや先成ふたつら
幸於ふとくろくさわなれむ

兼良公

養老院

我宿のほろりもろりぬ葛蒲茶こもひる糸小行春の衣

萬葉

從古人之言來流老人之變若

大伴宿祢
東人作歌

同

云水曾名負滝之瀨
田跡河之瀧乎清美香從古宮

大伴宿祢
家持作歌

續日本紀

元正天皇平城宮養老元年九月行幸同

二年二月再行幸從五位下多治比真人

廣足遣美濃國造行宮

同九月天皇行幸美濃國有當替郡多度

本居二ノ九二

山美泉戊午賜從駕主典已上及美濃國

司_上 笠麻呂
朝臣也

藤川記

乾野

十首

わづえのこるよりも新流のあ老とやあよ名は流らん
名も老成建つて流と字をたててこれ泉のりえは見え

一条兼良
風早實
後_の 務都
玄覺

養老社

社_の 地_は 美濃國_の 養老_に あり

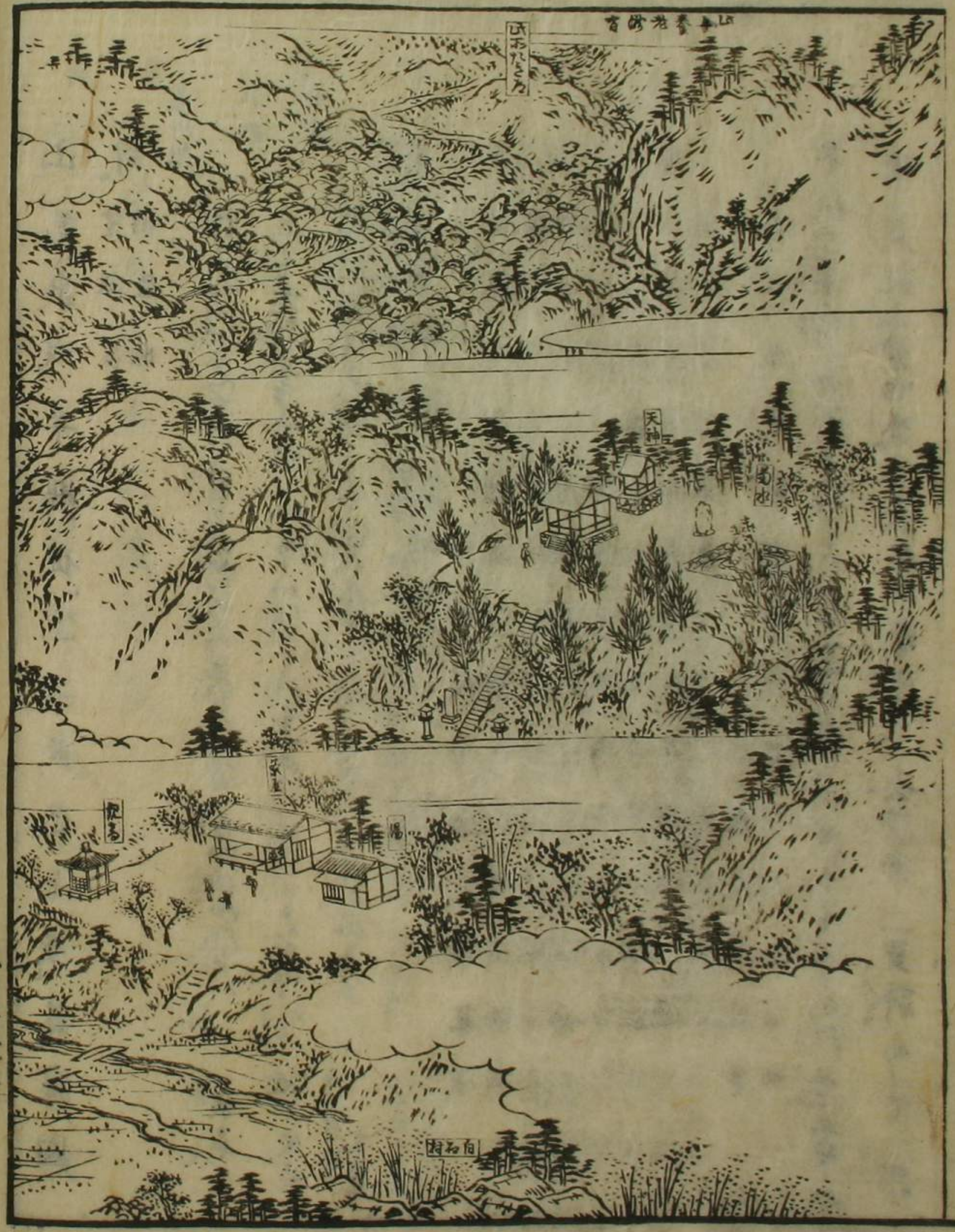
元正御極王道平問民疾苦閔物則天
當春之極多度之山天降嘉瑞地出奇泉
清潔可食養而窮人受其福王明之功
一飲如浴不_レ老不_レ死衰者再盛癯可_レ起
有本如是是_レ萬古混混君是_レ建_レ取_レ鑿_レ戒_レ其_レ堪_レ存_レ所
陵谷變遷十_レ年_レ歲_レ次_レ乙_レ己_レ正_レ月_レ吉_レ旦_レ識_レ其_レ堪_レ存_レ所

乾隆五十年者當日本天明五年也

それば瀑布のふり下り名高く代々の天子もろくは幸志の
幸意記小見由道と雲舟の南宮を去侍幸二里許あて一那



多度山
 養老
 天神
 養老寺



養老山

天神

白石

二九三

養老の龍



養老の龍

龍の窟

龍の窟

龍の窟

龍の窟

會の地ありて終を寫田と云ふそわたり山路ありて登れば養老亭
 ありて山間小風流の樓を建て其傍に浴室ありて入湯の
 人養老水浴場ありてこれに浴し老成ありての習ありて
 ありて附ら妓婦出く筆紙彈と三弦を鳴とて真紙傳はそ終あり
 養老の祠ありてわ瀨とひうて溪河を越石を傳ひ瀨
 登りて瀨と見其音遠近不きとて瀨とて山と多度山
 とつ山瀨の瀨を田孫川と云又瀨のやりに信妻石とて名石
 出る石面小坂衣景の控形あり又根芽は石の名を他境に勝れ
 て香強し真不危希文が瀨の詩小自粒洞を下川に飲とひ
 もと終りや比せん名ありてよはま子一の名とてありて
 美濃御山 山の上小一ツねあり

美濃御山

新古今

新拾遺

おひ物やこのお中へのおねをりこそいりも忘れど 伴務
 けろにみのおや万のあそふもたれふそろぬふ危 龜山院

續後撰

新後撰

日

後千載

後拾

丈本

日

現存

家集

新撰可枕

日

家集

本家十三家集

いほり(英徳の)おの岩松松獨り清き花年とゆゆらん

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

むくもつりてけりた友りかゝ英徳のお山の崎乃古枝を

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

和家

遊義門院

西家

西氏

後西家

入道

九家内之

西永

西方

西成

西好

西平

西常

本家十三家集

太平記十五

元和の以のふあうて

金蓮寺

桐基一上人十六世遺り他阿上人應永年中の基創なり

春王丸牌

日

相川

春王安王の墓

氏の恩顧を得し其其報恩のため先小戒師と成てり小墓

金蓮寺にて舞の附具

右の古治小嶋海乃うらと先や被り水此あらんを

日同上人茶毘塚

田の荒りて教田阿宗架蓮養坊と号し終宗

救るぬ英徳のお山の夕附おはれ松とさるひりか

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

まゝみのおもろ乃つまふくもつりて人ふゆとさるれむ

後院天宮

脚の宮

土清門

宮内

春王丸

安王丸

安王丸

安王丸

安王丸

安王丸

安王丸

安王丸

みく 日蓮上人の弟子六老僧の中 日蓮上人の弟子の遺骨を
日蓮上人の遺骨を 後醍醐天皇の御願で 日蓮上人の遺骨を
日蓮上人の遺骨を 後醍醐天皇の御願で 日蓮上人の遺骨を
日蓮上人の遺骨を 後醍醐天皇の御願で 日蓮上人の遺骨を
日蓮上人の遺骨を 後醍醐天皇の御願で 日蓮上人の遺骨を
日蓮上人の遺骨を 後醍醐天皇の御願で 日蓮上人の遺骨を
日蓮上人の遺骨を 後醍醐天皇の御願で 日蓮上人の遺骨を
日蓮上人の遺骨を 後醍醐天皇の御願で 日蓮上人の遺骨を
日蓮上人の遺骨を 後醍醐天皇の御願で 日蓮上人の遺骨を
日蓮上人の遺骨を 後醍醐天皇の御願で 日蓮上人の遺骨を

素名又なる

末をたせや藍川の忠をこれ千とせと誠の道よまけと

東春

相川

重井の宿のいづれか 藍川と書てあるは 粟田村の宿なり
重井の宿のいづれか 藍川と書てあるは 粟田村の宿なり
重井の宿のいづれか 藍川と書てあるは 粟田村の宿なり
重井の宿のいづれか 藍川と書てあるは 粟田村の宿なり
重井の宿のいづれか 藍川と書てあるは 粟田村の宿なり
重井の宿のいづれか 藍川と書てあるは 粟田村の宿なり
重井の宿のいづれか 藍川と書てあるは 粟田村の宿なり
重井の宿のいづれか 藍川と書てあるは 粟田村の宿なり
重井の宿のいづれか 藍川と書てあるは 粟田村の宿なり
重井の宿のいづれか 藍川と書てあるは 粟田村の宿なり

喪山

藍井の東川向の遊分の左本を路の
藍井の東川向の遊分の左本を路の
藍井の東川向の遊分の左本を路の
藍井の東川向の遊分の左本を路の
藍井の東川向の遊分の左本を路の
藍井の東川向の遊分の左本を路の
藍井の東川向の遊分の左本を路の
藍井の東川向の遊分の左本を路の
藍井の東川向の遊分の左本を路の
藍井の東川向の遊分の左本を路の

神代巻云

斫臥喪屋此即落而為山今在美濃國

藍見川之上喪山是也世人惡以生誤

死此其縁也 藍見川ハ相川の幸なり

青野原

藍井より街道のむらぎにあり 英徳の号ひりハ三聖と書
藍井より街道のむらぎにあり 英徳の号ひりハ三聖と書
藍井より街道のむらぎにあり 英徳の号ひりハ三聖と書
藍井より街道のむらぎにあり 英徳の号ひりハ三聖と書
藍井より街道のむらぎにあり 英徳の号ひりハ三聖と書
藍井より街道のむらぎにあり 英徳の号ひりハ三聖と書
藍井より街道のむらぎにあり 英徳の号ひりハ三聖と書
藍井より街道のむらぎにあり 英徳の号ひりハ三聖と書
藍井より街道のむらぎにあり 英徳の号ひりハ三聖と書
藍井より街道のむらぎにあり 英徳の号ひりハ三聖と書

木名ニ廿二ハ

樹邊の左を初勢が松

史本

恒々山を呼ばるはと松を青聖が京成屋とく過つれ

お尹

幣懸松

又青聖の一本の松ともいふ

傳云朱雀帝の清寧東夷平將門退治の府中山金山を神小

後ひましくて幣掛松の名が賞せり物に世に懸坂長範と云ふ風

賊はやくら小伝んで流雲と集先旅客を執ひは松より遠見せし進

土人懸坂物見松と云ふ古代の松云徳年中大風と倒れ今存ざるを

植徒の松なり

わろ暑く吹や一本の松をん書

もせ瓜

大切の名を盗まらふ者乃松

本因

君うべら鳥の物見やねすの松

本采

君みくつ松をまらぬの直あるふ

粟田 粟田 粟田

國分寺

青野村の中程にあり 入所あり 古言を義

粟田 粟田 粟田



長範
物見松

山形

川

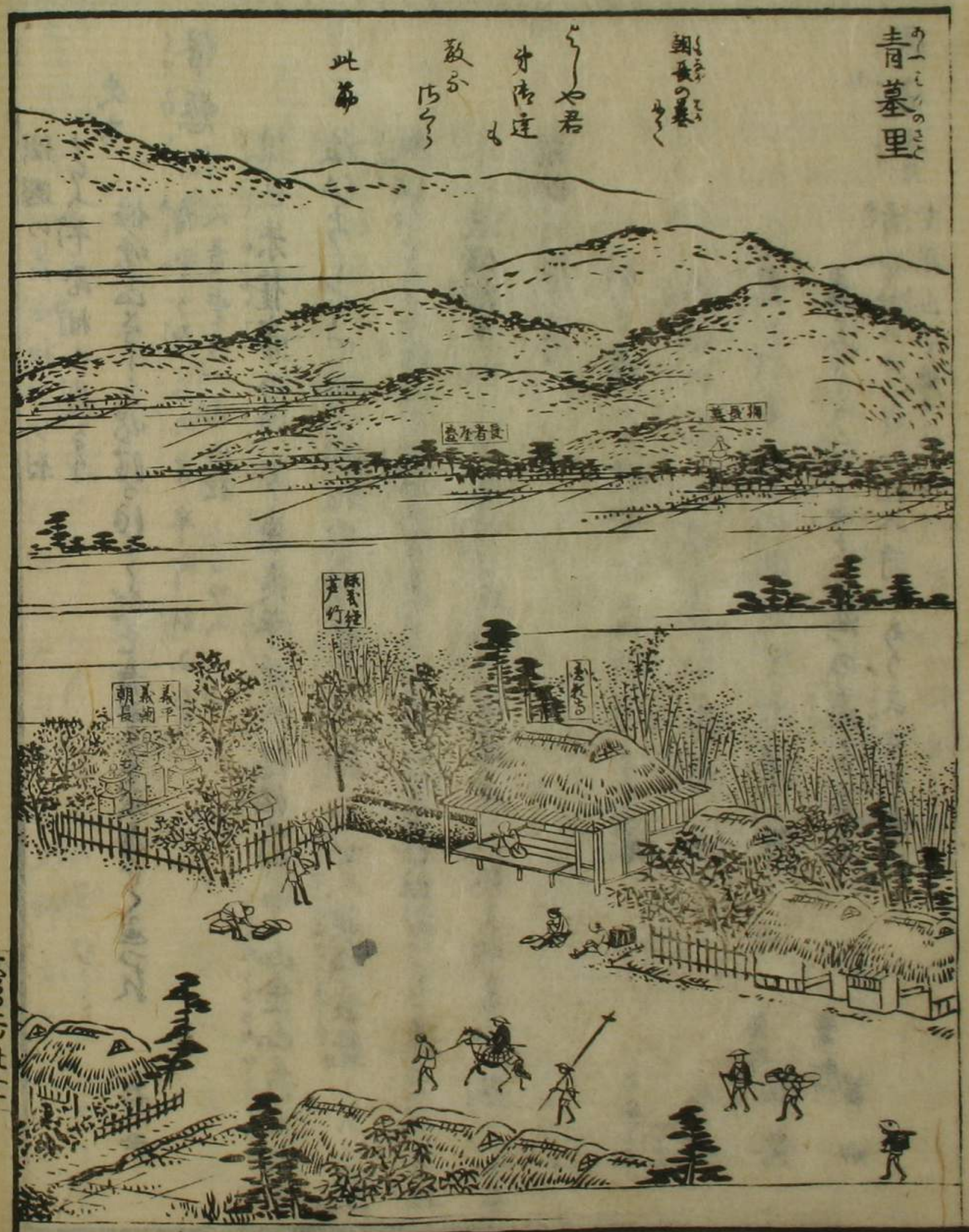
大橋

物見松

新町

村

山



青墓里

朝長

也君

舟渡

教

此節

山

山

山

山

朝長

山

本
二
九
七

本尊藥師佛 丈六の座像あり 墓の地對武部郡の記ありて建
礎石あり 中古廢し又信長公
の對山麓小橋一再建ふあり

青墓里 青墓の長の築海あり

拾玉

一疾足りの橋ふたちふら路不處らあそと此里

長濱

小篠竹塚

青墓に照手あり 遊女あり 照手あり 遊女あり 照手あり 遊女あり 照手あり 遊女あり

朝長墓

日所水の方山の麓より 朝長令従の幸を平治物語に
見くより後小畧り又長者の塚もあり

御勝山

香墓の東より 朝長令従の幸を平治物語に
見くより後小畧り又長者の塚もあり

甲塚

其南に 甲塚の地あり 我死の塚あり

赤坂

美濃 赤坂の宿あり 二里八町は宿 吳徳國不破郡安八郡
の郡境あり 宿内小石標あり

赤坂

あり小寺小社の積乃赤坂は宿より二里八町は宿 吳徳國不破郡安八郡
の郡境あり 宿内小石標あり

赤坂

赤坂

あり小寺小社の積乃赤坂は宿より二里八町は宿 吳徳國不破郡安八郡
の郡境あり 宿内小石標あり

赤坂

本巻二ノ九八

子安祠

赤坂宿小川の山の麓にあり ありて赤坂の

祭神

神功皇后 二代實祿

金生山寶光院

真言部義寺 十石 丈藪の中に安坐 法大陣の地あり

本尊

虚空藏菩薩 丈藪の中に安坐 法大陣の地あり

鎮守

御嶽権現 三月十一日 尚書の書院あり

寢覺里

寢覺宿の北にあり 寢覺の里あり

夫本

風の多小舟ありて 寢覺の里あり

伊勢大輔

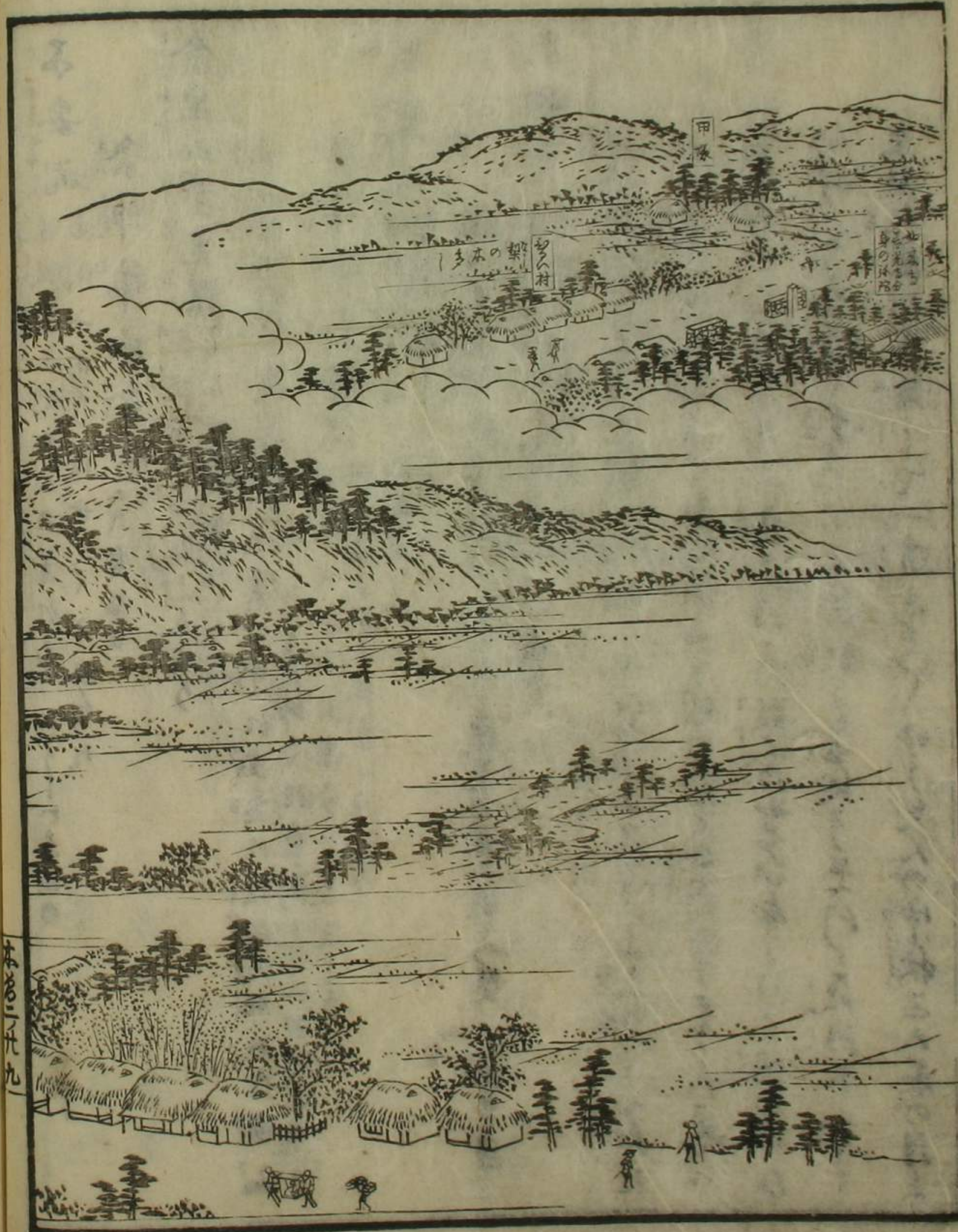
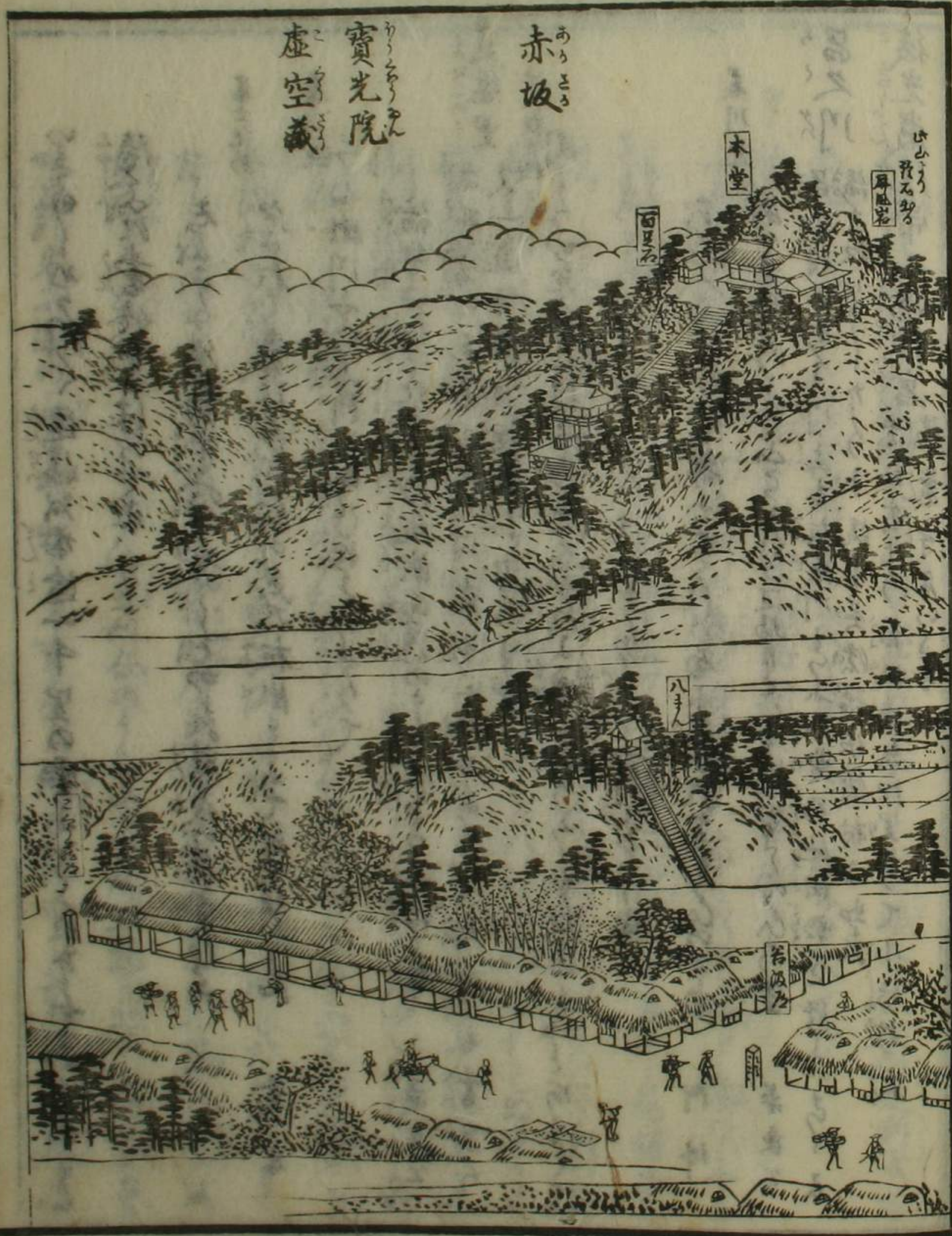
抗傾川

赤坂宿の北にあり 抗傾川あり

光行紀

光行紀あり 抗傾川あり

三日抗傾川小舟して一青志をくゆく 抗傾川の中 杖三の表の月



ついでにわが国へ遠信が来途一千里の雲ふさぎあけをせある家々
陸子に書はるはいつては

著士能り

志こころれた杖のまれを青くそめぬ旅度の月ををむひ

主考

藤川記

くわぬ川せうし所をゆきけりて

清守ゆたれすの侍抗敵何月のうきたもよる急侍の舞

兼良公

多羅里

又一説本掛体國海はなりとせ

十二夜日記

閑よりつたうしはるあは志づれよきとらうをば道をもつて

阿伴

石川記

あふ衣みのく中山こころはゆりといふゆきかぬひ乃里

兼良公

呂久川

呂久村小あり川上と抗敵川とよ大聖那池回船を結くまよ

後光厳院帝小嶋頼宮

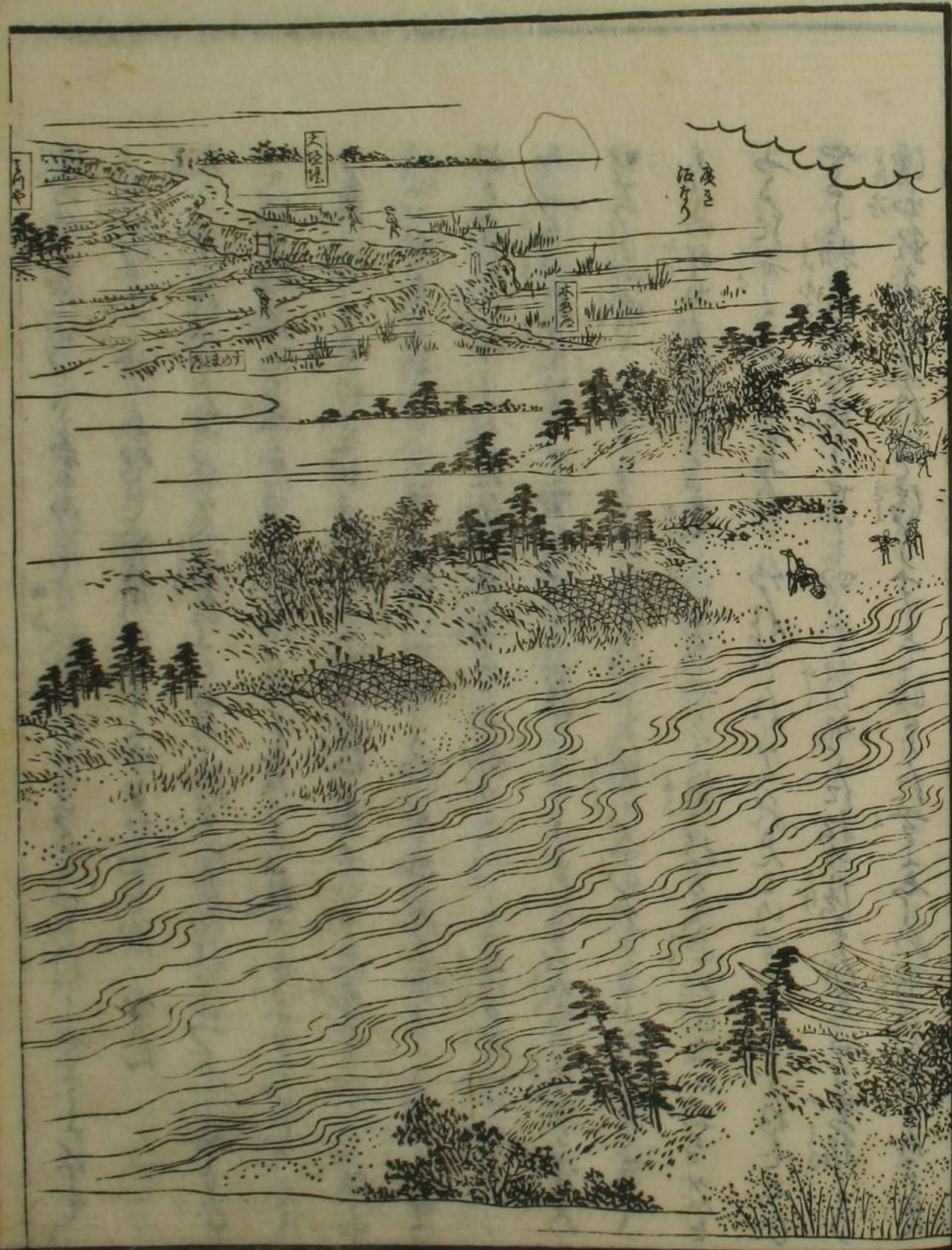
赤坂看より若成道成口里りて小嶋頼宮

は帝は南軍後醍醐天皇の兵小整れぬひう小隠棲志すは時足利義隆
の兵威弱くして英徳國小落らけ半太平記見思く

とほのすゝみ云

後晋光園攝政良基公著述あり

小倉山乃ゆりや中院乃軒の唐城身のかれ家とたの侍順つて
あそ人頼ひこいつて露の産もきそぬ産たゆきと抱う落月せ
うりうよよ後山おほらひう若く舟大とるどかひいそれそ
ぬむはうりかちやせせとどれおとてけけふとくもゆると
おのひおれうそせありり。園の東うわたうわの風ははあておとら
情るた世よるふのたのこぬうとつて志屋す。とたびくあり。と
かたつそほの中とそとのがれまづぐる世の育さぬふとく空へ
く赤松の鳥乃をまゆ。とそまひつてねんねとたのせとさ
たしねび七月たるあまうわ有ぬ乃月とそあぬうよ小茶は唐城
まぬく茶ぬとそ思ひ三川公のうらすもぬ小物うれ。はふま
おとれ身不國のゆきでゆるる幸を例るたとそあそと報國乃



杭
瀬
川
上
の
久
保

大
正
十
九
年

世の人々中へてわが故をても作らざる事却てけり小くは座敷に月夜ごころ
の月をみて有し中へては白くはなごらて色あはれ紅葉の枝ふらなる井の
まきまきむらびつひんて仲ふ新秋のまきまきとてさねとわ

浦にさしぬ深さうれおるそそ時毎にさうぬおるまねとる

浦返

ゆきゆく小瑞ふみゆまのむすもや紅葉の落るのいそぐらと年

月十方あまうりあ日秋のこゆる雨の中へてはまねを井と山高こ
必地を物じりりし新瑞はれぬ雪雲にまらぬ風の秋風あま
吹かぬ一と落つよすこゆりり幸はむとせゆりり
けのくくもあわぐら世のたりのむり一本れ九とあると云ける
まらぬ井のあまはつ圃のみゆまのたりのもえを天にまらぬと代く
幸るればむらびつひんて仲ふ新秋のまきまきとてさねとわ
都のこりこりさねのまきまきとてさねとわ

下巻の二冊目

陶のゆるる雨雲をまほ晴中へて千里北外の故人のまきまきとて
あはれと物あはれなり秋一よ吹ける風あまこよりまらぬと云ける
まらぬ井のあまはつ圃のみゆまのたりのもえを天にまらぬと代く
幸るればむらびつひんて仲ふ新秋のまきまきとてさねとわ
都のこりこりさねのまきまきとてさねとわ

名ふたつた光景のたりのまらぬと云ける

藤舎はた酒言乃のけりまらぬと云ける
あまの月夜ごころの月をみて有し中へては白くはなごらて色あはれ紅葉の枝ふらなる井の
まきまきむらびつひんて仲ふ新秋のまきまきとてさねとわ

河の
 下流
 船の
 中より
 流るる
 例の
 股門
 せ

河渡門

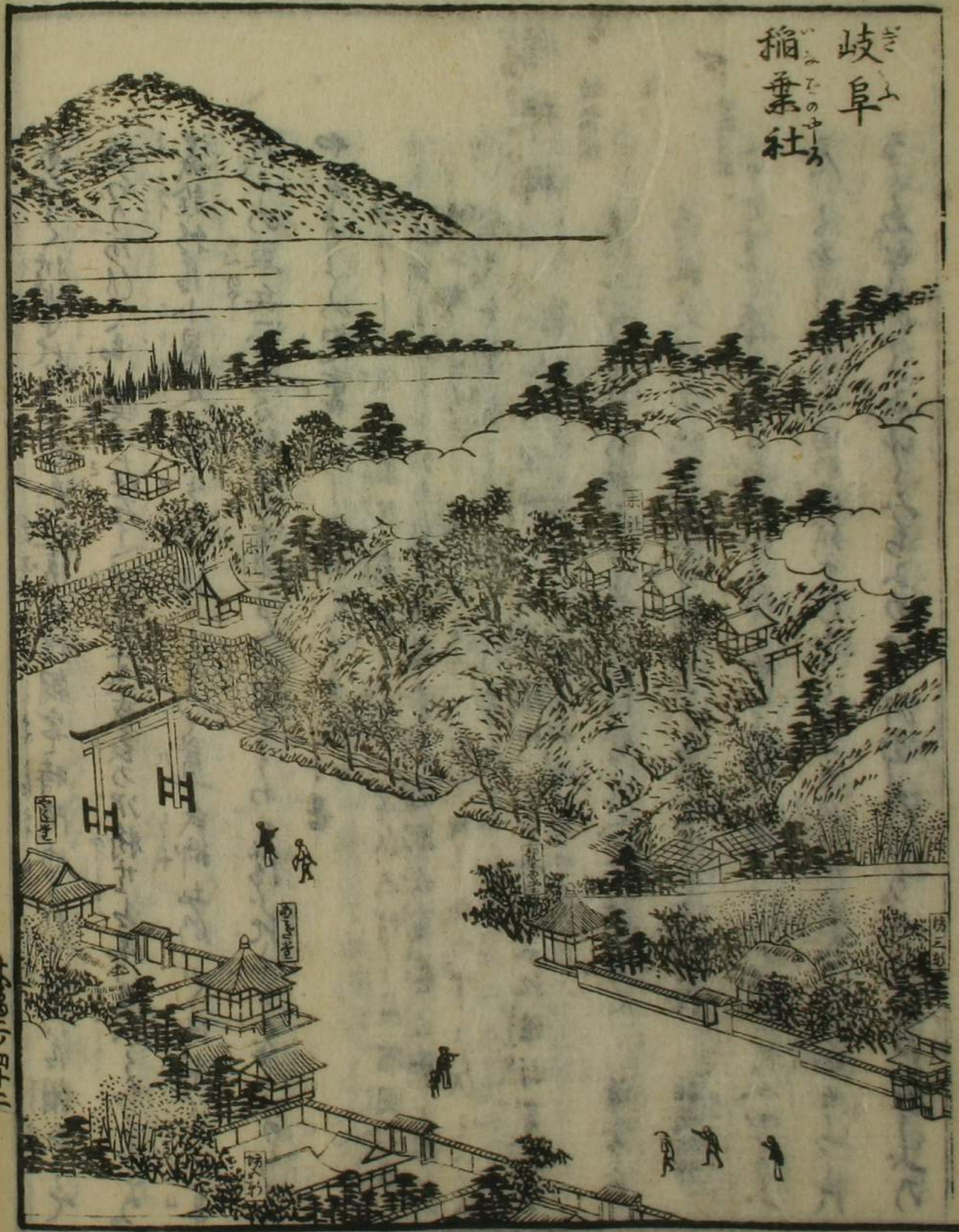


とて短冊をうり給られ。文人も右大臣の四顧の詩をまねおの詩も
情事と稱せし種々次々新の短冊を繕をれり。おぼやけは月をほつてわ
しほとふゆる月一を紙中知れとて奏し給へり。

その是てもとてはの玉れつる人そのふ紙上毎ふ筆はたて給

面をて返し紙給りたりしあふおとくするこり人と筆はたて給りた
これにあらふ心志をそおのし給くえし給へり。さうして有し中へ紙ふ
風つしつと吹給へり。これゆへに物もそとに給ひてく吹給りてその
本も折るし吹給へり。よもあつてむはさし給へり。さうして吹給へり
ゆへに吹給へり。さうして吹給へり。さうして吹給へり。さうして吹給へり
みれし吹給へり。さうして吹給へり。さうして吹給へり。さうして吹給へり
あつて吹給へり。さうして吹給へり。さうして吹給へり。さうして吹給へり
さうして吹給へり。さうして吹給へり。さうして吹給へり。さうして吹給へり
風あつて吹給へり。さうして吹給へり。さうして吹給へり。さうして吹給へり

給ふ給らるしねを兵安寺とて二人隠きあり。三実成信のこり有
侍りるをあげし御あつるをいひてありてし。さうして風の海をわり
つみどりも飛まわつていひてありてし。さうして風の海をわり
還幸とせしむる事あり。た幸をたてて奏せしむる武成ももたて
ゆへに幸あつてし。さうして奏せしむる武成ももたてて
はゆへにその行幸とて都の人くめり。ゆへに是をまうと縁幸をれ
はゆへに非常に儀ありてし。さうして思ひくふにゆへにはゆへに
ゆへにの御文御行とて還御あり。徳全宰相中將もゆへにほくもゆへに
ゆへにの都の道もあつてし。さうして先でし。さうして斜るゆへに今も
侍奉内す。其しき將軍さうしてゆへにゆへに今も侍奉内す。其しき
ゆへに高鞍のあつてし。ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
あつてし。ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに



岐阜山
稲葉社

大坂 八十四三

神とそまゆるといふは

神の御座らるるむすしの神を度るひねり我々もたて 阿佛

美江寺

河波寺を一里六町 距中左右お射して巻とすん

美江廢寺旧地 宿願地 社 舊跡あり 聖江寺 觀音 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子

土岐頼朝 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子

自然居士墳 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子

名産 稻 瓜 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子

谷及親音 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子

系貫川 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子

金葉 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子

新十載 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子

日 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子

新勅撰 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子

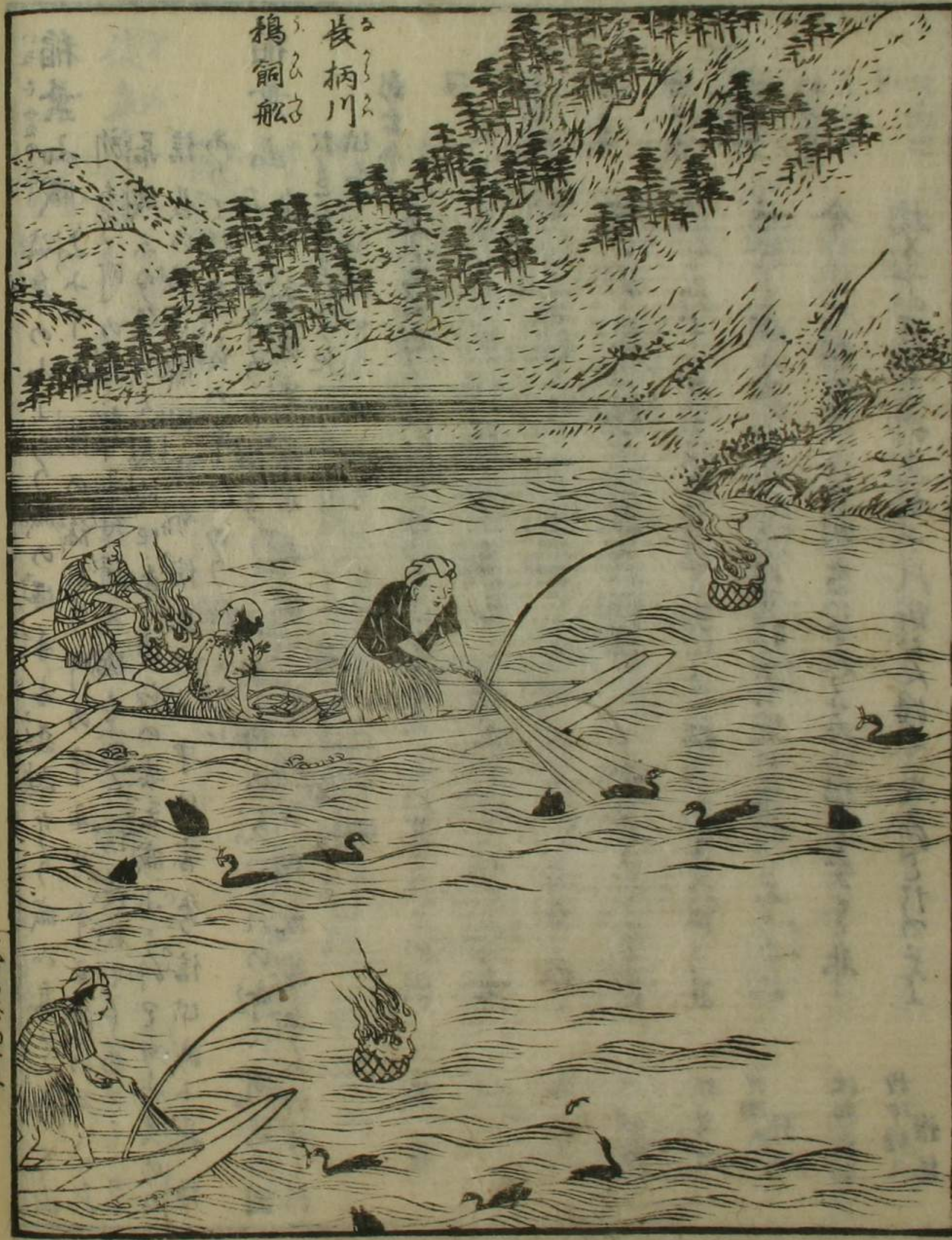
船本山 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子 聖徳太子



精細を
 足く
 かま
 火も
 涼
 橋の
 長柄川
 美濟



夕雲の
 舟と
 燃く
 精細
 長柄
 の
 川
 美濟
 八幡
 美濟



長柄川
 鵜飼船

大正八
 年八月

日

後拾遺

御集

支本

日

日

日

日

日

日

日

日

紅葉せし秋の掃葉の所は風小松のこ強さをありき

保家長

物とせし風のほてふたふとく掃葉の山小はとく由吉

後平陸楠

いは山松乃嵐や寒うく人ゆりやれ里小夜うけり

後高時院

今あそとまも掃葉の孝乃松移しあうれて言そ

光昭寺の
入道

後麻する花乃下風立りれいさよれ山の松せうひる

後永松
持政

立帰る今はいふれ山風よ山の言するも山鳥の丁魚

存家

人よそ我れ掃葉の山風小言ふあうれを唐そ鳴る

通具

志うくともおとそ先ぬ不破の園掃葉の山乃いふはひや

園幸

孝乃松すその花もうちひきいおろ山左を秋の風

慈彦

ふは山言れ松風涼暮てむく雲白く出る秋乃月

法外

秋の田乃かひは言とれそくちく掃葉の孝乃松風

仍彦

帰んやのひ契松頼中いさよれ峯にまのそく

整度
隆長

園幡神社

延喜式云物部神社物部氏の祖

建保百首
後川百首

本居二四十六

祭神 五十瓊磯入彦命

垂仁天皇の皇子

鳥居額正一位 園幡社

文永四年丁卯 佑統二日
從三位藤原朝臣經朝書に

尚社付ト先ト伊奈波山椿原に徳彦ト孫ト天文八年此ト海

每孫秀就城を築く時今の地ト遷座ある又土人の謠ト云は申ト

上右と園幡園トありト神跡ありト山金元山トもト陸奥

の金元山ト似るとト神名帳及ハ三代宮録ト見えト物部

氏の祖トト我々幸社の傍ト神本三本松トありト末社ト中

門田廊石階殿を居明鶴庫玉瓊繪馬殿下段の地ト説ト社額

壯嘉トト一保トは年一收舎の生ト神ト我々志トれト

長柄川ト下流ト是ト園幡ト山乃藤原ト孫ト孫ト園幡トありト

鶴飼トト長柄村トより尾列産の令令改変ト書トト河上ト

漕の舟ト園の衣トねを懸トし此のゆかりトト物ト鶴飼の綱

とけをた鶴飼トト又先トト一人トト移トト十二三ト

長柄

五川記

けうの継成とてん幸いと具あり

十七日卯のしぬ輝子序出のほどにけふ物と鶴飼を見たりと渡の舟

なり休まての舟れがと一腹をゆりけとそれふのわて見物に舟

け川のけがりわを固ふるねを漁子に舟をさぐんてう瓜皮にて

夕やふいふもめれのわらじのゆる鶴の子に舟をさぐんて

鶴の魚皮もふすく鶴飼乃も徳とありけし神をさまよふて足は

をさぐのふかぬまのべがと長もゆりてさく無とり有きもの

鶴のふみふりやれもこれ徳来もむきゆれもはくありを

則鶴のそたてと結成ゆわ史ふ厚たて美徳とてねをさぐんて

嫌せのひまうりてはふとかん

てわらぬ想成ゆわ史ふ厚たて美徳とてねをさぐんて

鶴飼毎以て

母の流うてやうく悲しき鶴の子に舟

本巻二四十五

長柄水樓

けあてり目ふんゆるのみれ流

彼岸山

峰あや古井乃しけりち同りん

岩田小野 波年の小三里

十載

今はしもほおぬらん美徳乃岩田の小野とすれ

新後撰

志れつ小岩田の小野とすれ高かりしをほおぬらん

後後拾

りよもを岩田の小野とすれ高かりしをほおぬらん

鶴沼すてに里八町南城主永井彦三万二千石領せし

加納

町長一又商人多しは年一を里町継きり

天神社

加納の宿内ふあり文安の頃土岐の長尾兼成が在りし利永の

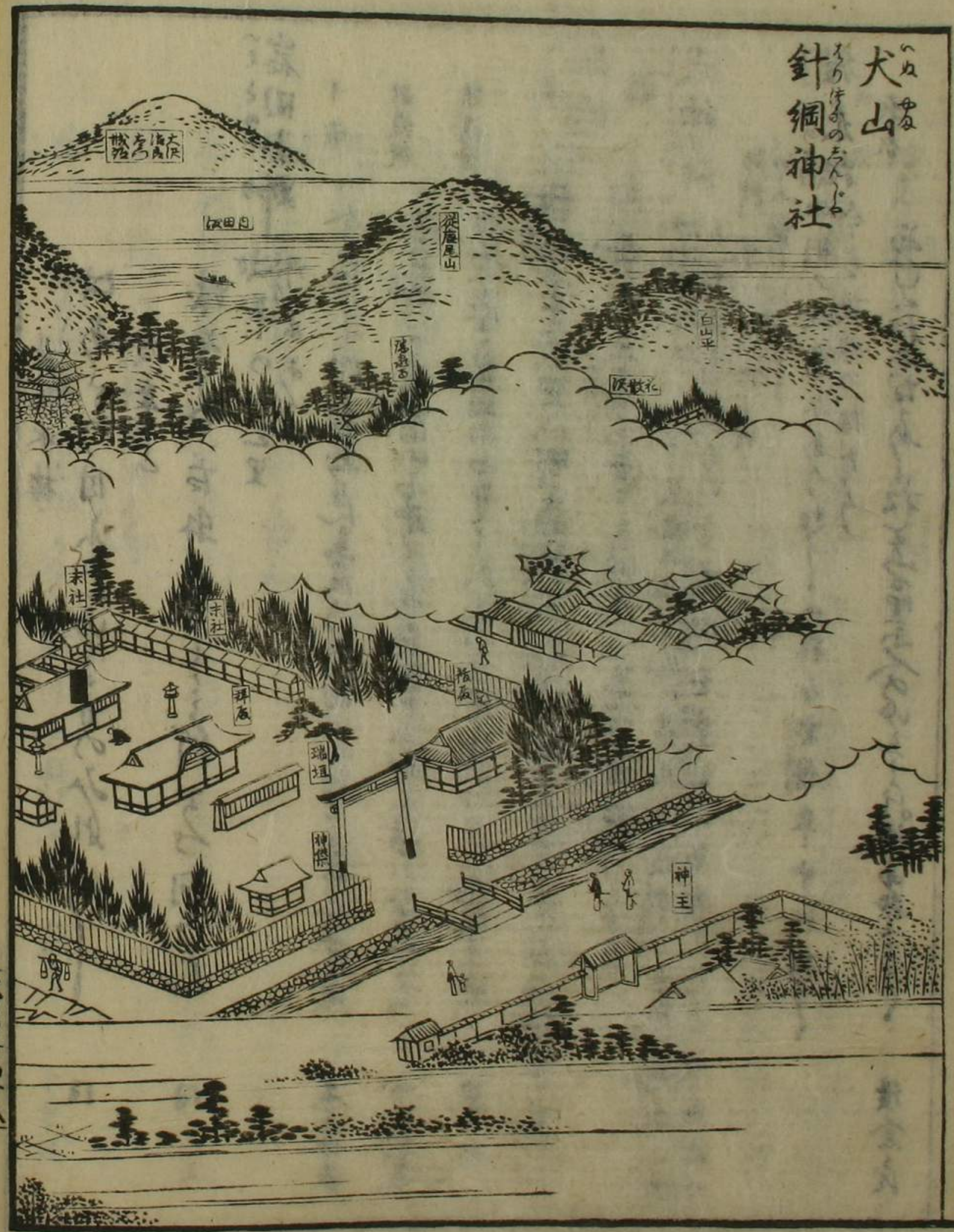
の所 菱公成継ぐ

往素松 今を抽次のかたり

我歌

あけなれおたりねとて里小人のゆきこれ後をさぐ

後念



犬山
 針綱神社
大森山



針細の創案

八月廿八日

神幸あり
社勢ハ騎馬也
佐子ハ十二の
御醫御弓御帶等
十二ハ神玉の御指
御醫御弓御帶等
それより神幸
神幸あり
社勢ハ騎馬也
佐子ハ十二の
御醫御弓御帶等
十二ハ神玉の御指
御醫御弓御帶等
それより神幸

題林

あはれ足したる通縁の松ひろく口はくゆさ此名成るゆらん

武志 実法

瑞龍寺

加納の小山の半あり瑞龍寺山といふ妙心寺悟侯和尚の
開基應仁年中長徳守土は成樹菩提のお土は長良
の法号と瑞龍院殿に号し

苗部神社

加納の苗部村あり
延喜式内なり

比奈守神社

加納の比奈守村あり
延喜式内なり

新加納

加納のひがしにあり
延喜式内なり

飛鳥田神社

飛鳥田村あり
延喜式内なり

加佐美神社

加佐美村あり
延喜式内なり

御井神社

御井村あり
延喜式内なり

名勢野

名勢野村あり
延喜式内なり

針綱神社

針綱村あり
延喜式内なり



村國神社

各勢郡各勢村あり
今白山と村に延喜式内なり

鶴沼

左田中で二里宇留間とも書て又賣間の市とも云う
より尾列犬山の城見也其名古を七里あり

後拾遺

惟子山

東海のうたうたまをいふ事あり人の向ははらなり
惟子村あり

勝山窟觀音

本若川の大叢の中に石像れ觀世音以安並一傳あり
清泉流まはるは側の風色のちさくして若石崖窟より地湧水く

まきく奇絶の所

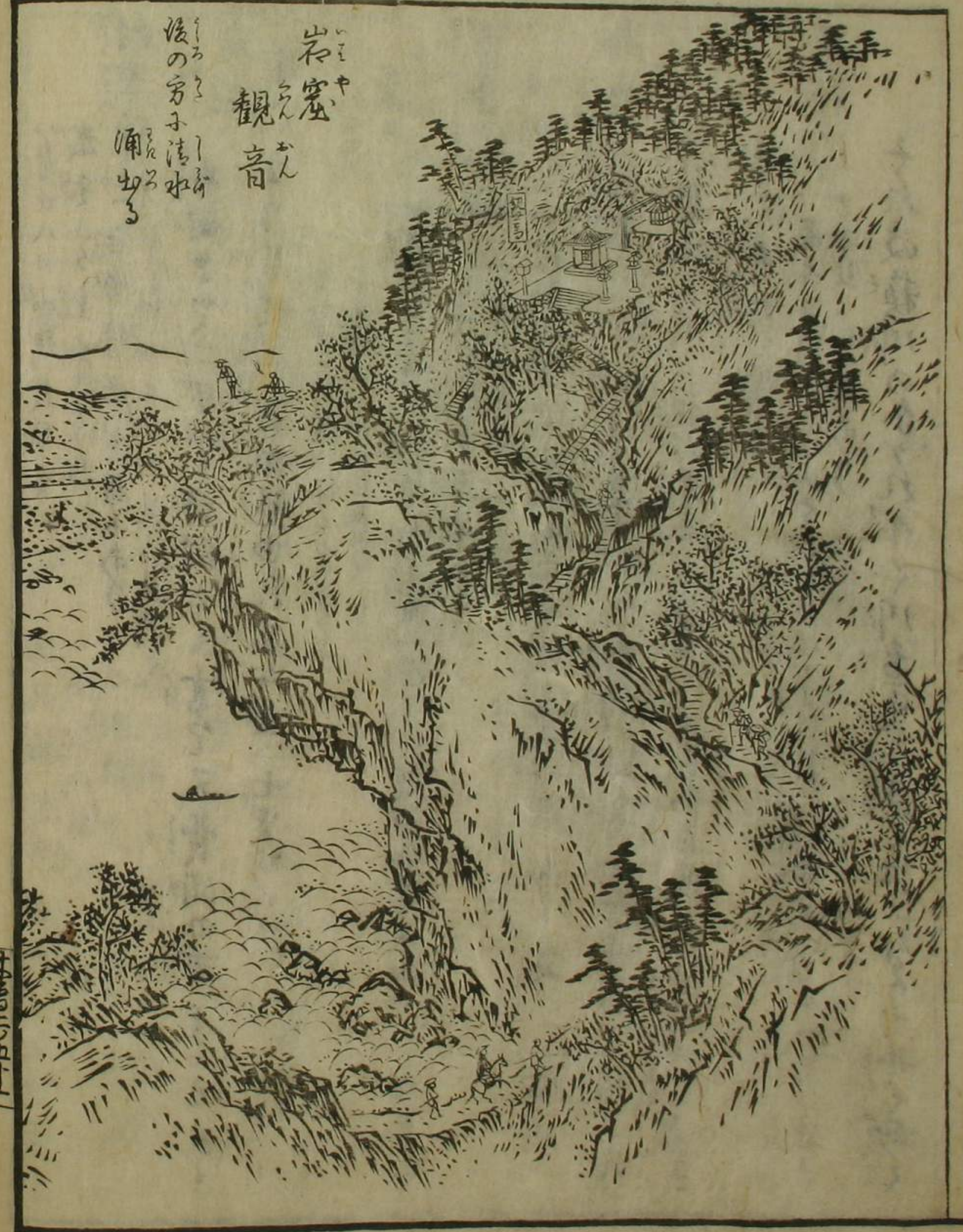
波蕨川

一名若田川ともいふこれよりひがしには川筋右へりり左へはく
それ波蕨川のおぐれ早く川邊の岩多くはくちりて奇く妙く

親吉吸と
 大岩多し
 下の老田川
 秋のゆたふ
 英波路
 水一乃
 風来たり



岩窟
 観音
 後の方子清水
 涌出



千雷をてつてつたふたひあま
 千雷をてつてつたふたひあま
 千雷をてつてつたふたひあま

美大田

伏見まで二里は肩お對して巷はるん幸ふ所許
 伏見まで二里は肩お對して巷はるん幸ふ所許

名造園鍛冶 名造園鍛冶 名造園鍛冶

名産竹屋材 名産竹屋材 名産竹屋材

名産炭紙 名産炭紙 名産炭紙

大田川 大田川 大田川

縣主神社 縣主神社 縣主神社

大田川は川の東にあり一里上り河合とあり本所あり本所あり本所あり
 縣主神社は河合の北にあり延喜式内



鬼首塚

けさの けさの けさの
 二ノノ 二ノノ 二ノノ
 見よ 見よ 見よ

金山古こ城じょう 右田の東にあり信長公の居城三左衛門

伏見美濃 御岳みだけ 中なかつでまき里まきりの間にあり西にしにまき平ひら地ちあり性しやう還えんの左ひだり 右みぎに列れつ樹じゆの松しょうあり東とう海かい道だうの西にしにまき里まきり東とうに列れつ樹じゆの松しょうあり

在原行平塚ありのら 門かどの西にしに小こ由ゆ縁えん

鬼首墳おにのくび 合あひ後ご中ちゆう村むらの間にありむく園をんを布ふとす

御嶽美濃 細は久く手てで三さん里り宿しゆく中ちゆう五ご所しよ許もとお對たいして巷ぢやう城じやうを其その存ぞん救きうを

大寺山おほてら願ねん興きやう寺じ 御嶽みづたけの宿しゆく乃すなは西にしあり

本尊ほんぞん蟹かに藥やく師し 傳でん教きやう大だい陣じん

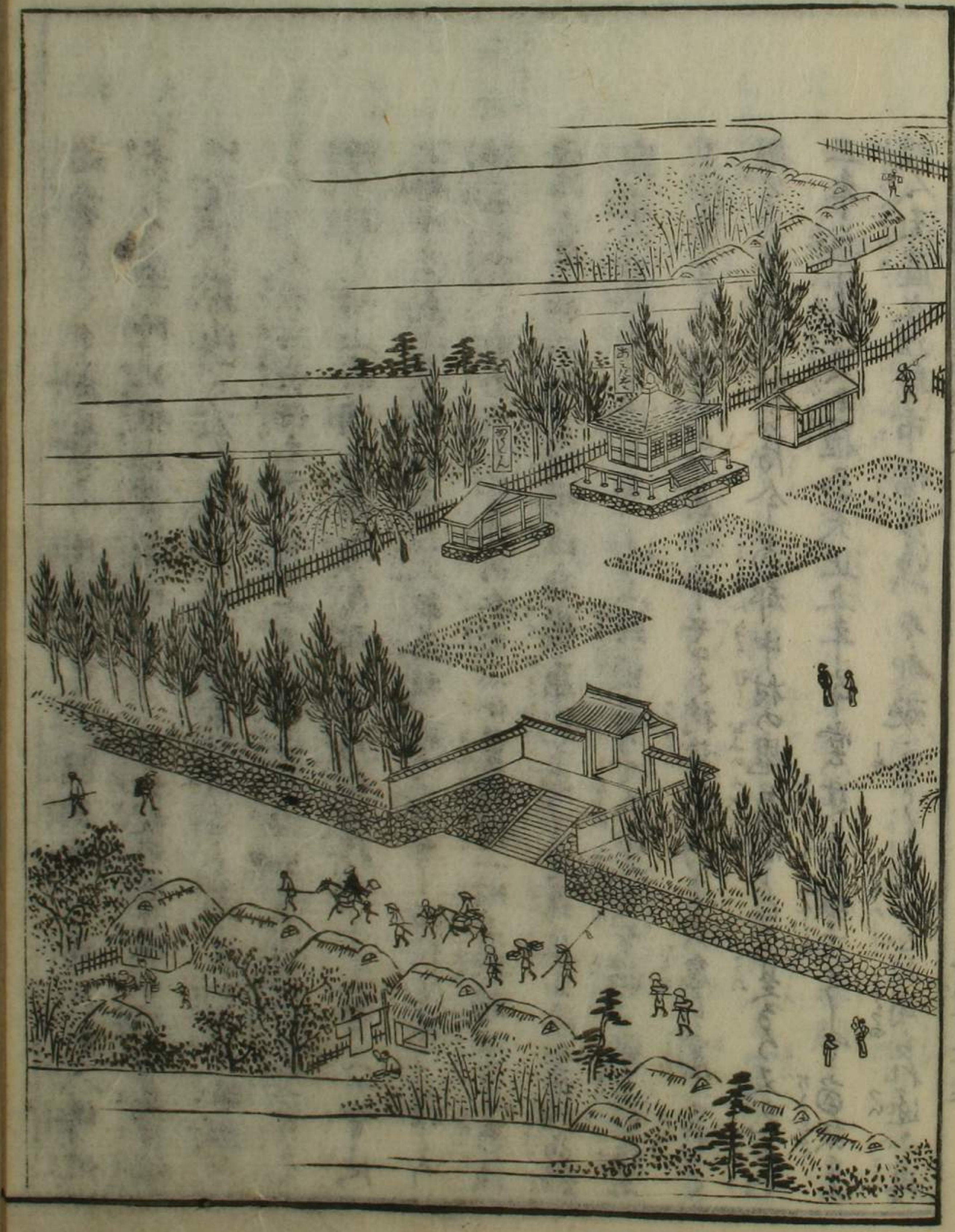
阿弥陀堂あみだどう 本ほん堂どうの西にし

庚申堂かうしんどう 右みぎの隣となりに

閻魔堂えんまどう 本ほん堂どうの東とうにあり

護摩堂ごまどう 奥おくの方かたに

支那寺しなじの住すま持ぢ天てん皇わう清せい宗しゆう弘こう仁に六ろく年ねんの頃ころ傳でん教きやう大だい師しは地ち湯とう城じやうに免めん人にん民みんの病びやう苦く救きうんが爲ために像ざうを彫ちゆう刻こくして給たまひ奉ほう堂どうに安あん坐ざして終しゆうつ其その後ご正せい曆りやく四し年ねん一いつ條ぢやう院いん乃すなは皇わう女にょは地ち本ほんを葬まうて葬まう敷しして行ぎやう智ち尼にとて專せんは尊そん像ざうに歸かへり生せい身しんの容ようを好このまふ事ことと朝あさ香かうをたふ新にいの寺じより更さらに地ち事じ形かたあり行ぎやう智ち尼には寺じの西にし南なんに地ち大だい池ちの傍はたりに法ほふ經きやうのひたふ小こ城じやうに風ふうを晦まい暝めいして一寸いちゆん八はち歩ふに藥やく師しの末すえに救きう千せんの蟹かに圍ゐ繞にやうして涌ゆ出しゆのひに行ぎやう智ち尼に小こ苦くを日ひにけ地ちに育よく縁えんの衆しゆう生せいあるが故ゆへに地ち益えきを垂たん奉ほう思しふ海かいより海かいに包ふくむ一いつ字じに造ぞう立たしこれを安あん坐ざせよと宣のたまふ今いまは所ところを尾お池ちと号なづふ山さんを呼よんで醫い王わう峯ほうに時ときは長ちやう徳とく二に年ねん二に月げつ七しち日にちに始はじまり里り人にん驚おどろ異いに遠とほ近ぢか稻いな麻まのめく集あつまる幸さいれより一いつ國こく府ふ小こ申まうし遠とほ小こ天てん聽しん小こ達たつ一いつ處ち感かんの餘あまり佛ぶつ圖ず造ぞう營えいをてて九く三さんとせの妻さい杖じやうとて



御嶽驛
 可兒薬師

本巻二五十四

諸堂として成就せり因茲之寺山願興寺を辨以別入佛成
書あり導師比叡山覺運信正ありて出現の靈徳を行智尼た
城腹小籠後より今本寺より八百餘家と稱るとも下も日貴賦群と
るなり又厥后長保元年正月七日大般若經涌出せりは所と名づり
經ヶ淵と稱ぶ其頃南國賀茂郡賀茂村小籠より三千六百文の寺地
と賜りしこれより毎歲正月大般若轉讀をせり内日元年二月より
棟本を祀るを始む天仁元年の兵火小伽藍僧坊一時は炬燵とす其後
正治元年時の鎮主續源吾盛唐力とて再興其乃其頃南國
寂本の叢窟より因を即より強盜ありて小人民を悩め賊室と稱め
て内幸より鎮主盛唐力に奉その小伽藍僧坊をけしつゝ忽ち廢す於
攝すこれ首領別ら内今南郡中村の鬼首塚より是なり又元龜
三年兵燹の災小羅ふ天正九年辛堂建之願主として尚秋
任人王置与治郎市場左衛門右郎施主として治志以用られ遂小再

本居三十五

源宮

其に即今の伽藍これより辛堂を指回小指に同辛より長日尺守靈
佛用庭の特業障淨と寧親より小中寺以爲はもとも勝勝として拜
せざるもの多し又寺より出所の乳本を乳のまは婦人小靈驗あり
其外土伎斎衣武田森等此家より在捨多し又可児の替女可児の
才媛が由縁奉ておろす小籠ありはけ靈言と東山道よりはけけり人
馬を止免所靈をせり指今に入るおにけりしとせ

祭神八坂入彦命 八坂入媛の靈を崇む

景行天皇四年美濃泳宮行幸

百岐年三野國之高北之八十一

鱗乃宮尔日向尔行靡闕矣

頼あつてこれ地ふむとせりしを道の志とせり

日本紀
万葉
夫本
日

光植

和泉式部墓

和泉式部墓 伊予十町許ひがしおる本所の
たふありてふ塚あり半洋あり

鬼窟

鬼窟 小園を削りてしう盗をりし跡と云

一香清水

一香清水 坂十方本村ありゆへに
平岩村の南長瀬村あり虎溪山と号し

永保寺

永保寺 永保寺の南長瀬村あり虎溪山と号し
永保寺の南長瀬村あり虎溪山と号し

平岩

平岩 平岩村の左の方ふ平石
とて大巖あり

細之手

細之手 一里二十町山家之坂多し系より下りては
細之手の南土波郡の肉月吉里日吉里西村
坂多しこれより細之手の細之手の古地の高れなり

月吉日吉里

月吉日吉里 細之手の南土波郡の肉月吉里日吉里西村
は約より三日月形の白石名石あり少人せよ美矣ん

夫木

夫木 墨のふれを貯り小を貯るひのり坂とて月吉の里
月吉の里

山家

山家 我る星のしるひるるに育的の月吉日吉里なるて
西の

新取

新取 月より日吉の里あり
月吉の里

月吉

月吉 月吉の里あり
月吉の里

山家

山家 月より日吉の里あり
月吉の里

新取

新取 月より日吉の里あり
月吉の里

山家

山家 月より日吉の里あり
月吉の里

琵琶嶺

琵琶嶺 細之手より三里嶺あり遊至りて嶺に
ゆるゆるありての白の飛騨山の向あり足ゆる白の山

母夜岩

母夜岩 下あり
下あり

烏帽子岩

烏帽子岩 其れをりて名あり
其れをりて名あり

大井

大井 大井中より三里半細之手大井
大井中より三里半細之手大井

大井

大井 大井中より三里半細之手大井
大井中より三里半細之手大井

大井

大井 大井中より三里半細之手大井
大井中より三里半細之手大井

大井

大井 大井中より三里半細之手大井
大井中より三里半細之手大井

大井

大井 大井中より三里半細之手大井
大井中より三里半細之手大井

大井

大井 大井中より三里半細之手大井
大井中より三里半細之手大井

大井

大井 大井中より三里半細之手大井
大井中より三里半細之手大井

大井

大井 大井中より三里半細之手大井
大井中より三里半細之手大井

大井

大井 大井中より三里半細之手大井
大井中より三里半細之手大井

大井

大井 大井中より三里半細之手大井
大井中より三里半細之手大井

大井

大井 大井中より三里半細之手大井
大井中より三里半細之手大井

大井

大井 大井中より三里半細之手大井
大井中より三里半細之手大井

大井

大井 大井中より三里半細之手大井
大井中より三里半細之手大井

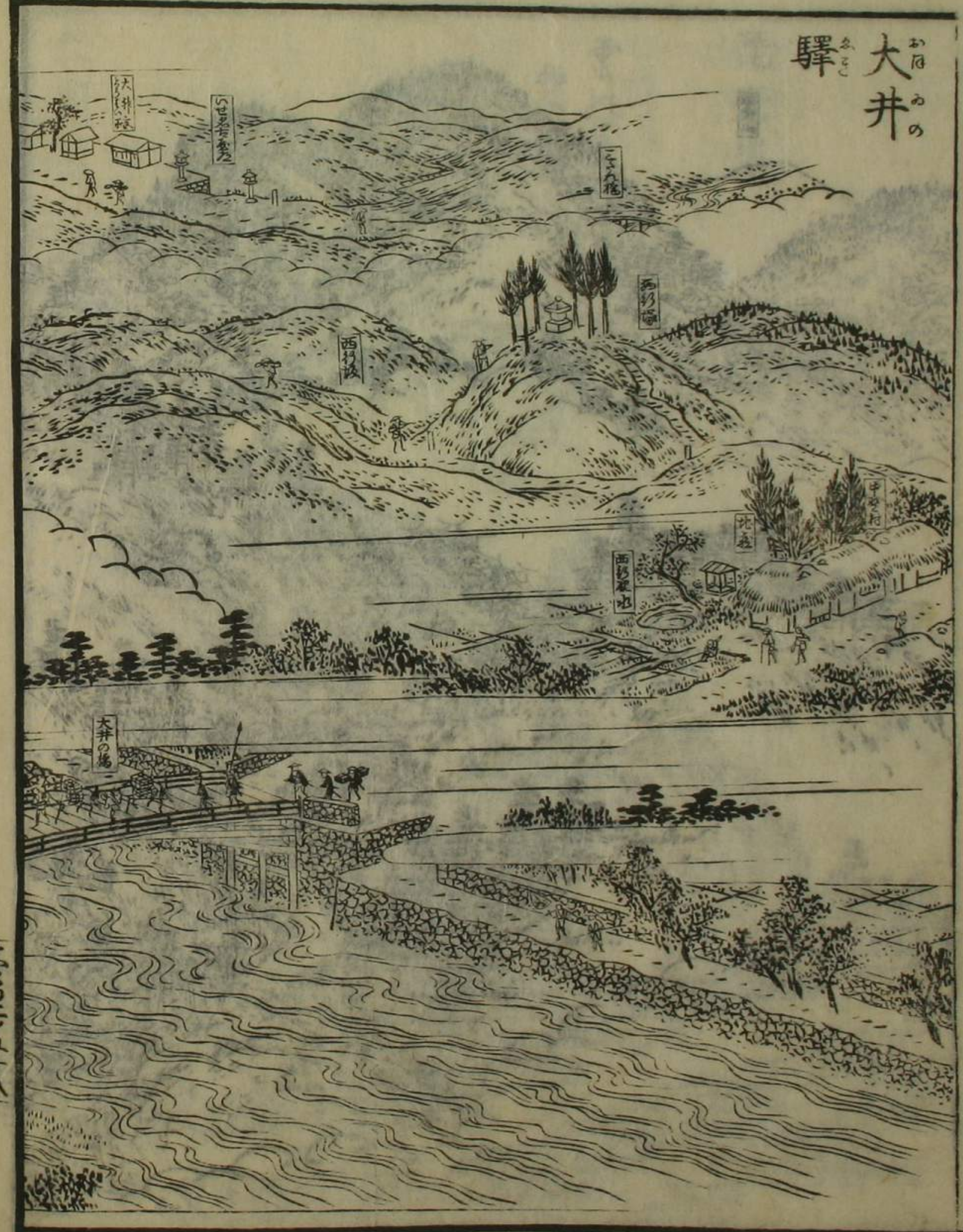
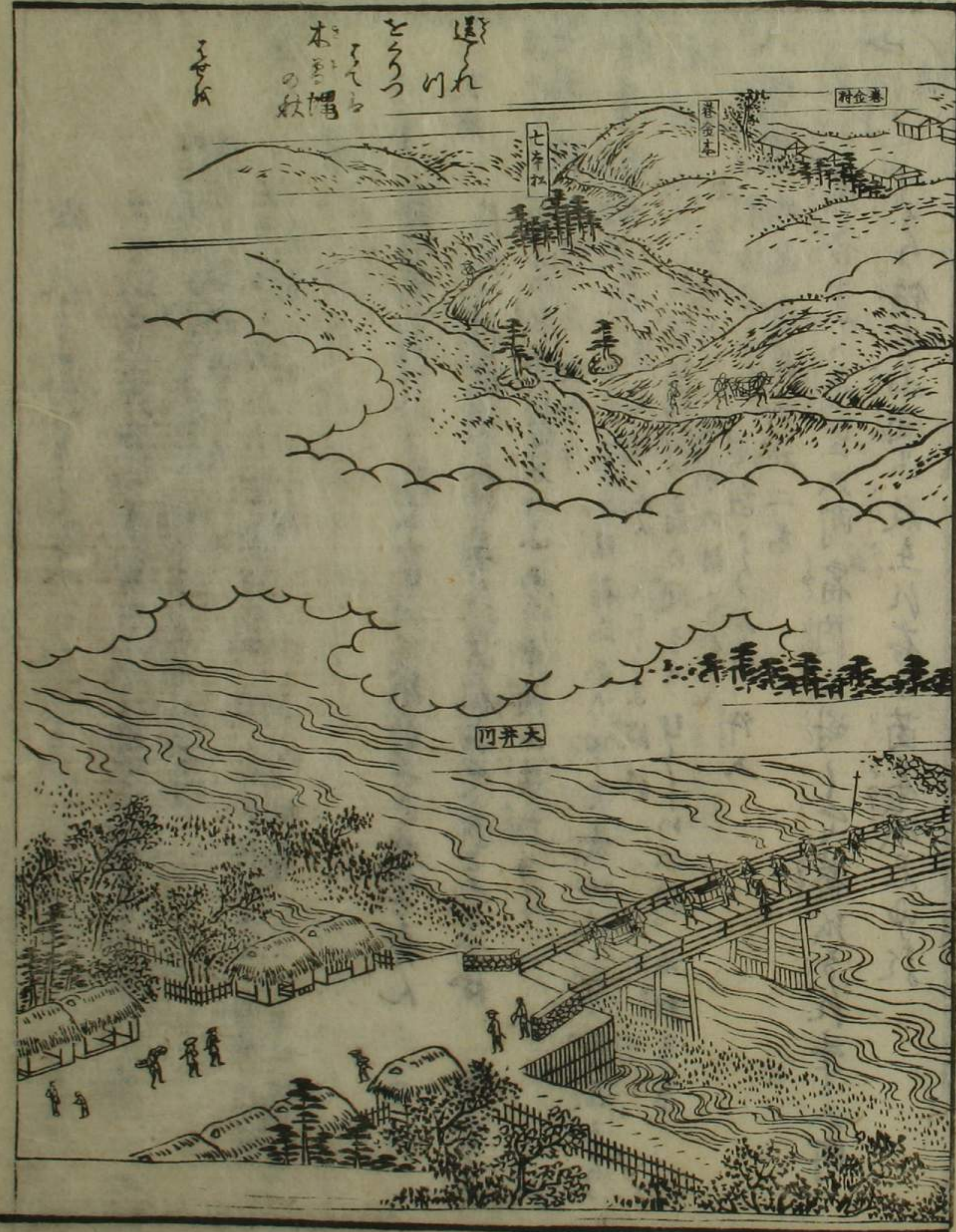
大井

大井 大井中より三里半細之手大井
大井中より三里半細之手大井

大井

大井 大井中より三里半細之手大井
大井中より三里半細之手大井





表のくさくさのふく風とくく大井のよきに教をきく あり

ちんれつ入おろ種の手はるあすもどはまんとすん 日

は二首のすゝと西川と記して大井の宿内

花あ山 大井の宿の南東に村の中橋とあり所ふあり西行法師

遺れ又其附の井も 東川のゆりふ三年ふ小住して竹林庵とあり店の石を

山家 思へく花のあうん本の中に何れかけし我をきん 西行

花あ 此書にきみける言はれぬて表とすす家 後念

大井橋 大井の秋西の方へふあり中間小橋板あり

根津基平墓 大井の東石塔村ふあり甲辰武田信玄の家あり

坂中 大井の宿中津川の宿の間にありむいひは所宿あり

八幡宮 延喜式ふり坂中の秋これし

落合 落合中津川宿内お對して菘坂るん幸ふ町

中川神社 中津川の宿ふあり延喜式内

惠奈神社 中津川宿の巽ふあり延喜式内

与坂番所 与坂基ふあり尾州公あり

落合五郎兼行靈社 落合の宿ふあり本居義仲の

寐物語の里より落合の宿まで凡三十餘里英傑の境あり

琵琶嶺より山路より英傑路と垂舟歌栗田光典の考がき

交々くふ記をみるむくく惠奈郡ふ古道ありて英傑玉

小蘭原伏屋をど入まう幸三代帝録を見くく天曆天徳の

頃より奇みも信濃を極る落合より却く唯日嶺まで四十

七里大畧山中にて坂まなれどけくき所ありみふ山原る

ゆへ人の心重なりてむきく後藤全のそてふく張方あり

くくふまは先やうし又山川乃くくら林本のあざら徳列み

まぐれくくあうくくり人くく形くくて道のゆきくせり

かゞ心志^{こころし}が^あま^り二^ん冬^{とう}初^{はつ}喜^きの^こ後^{のち}を^あ雪^{ゆき}深^かく^して^ゆき^き穩^いや
形^{かたち}を^あ核^{かく}道^{みち}か^んは^り領^{りやう}主^{しゆ}より^え絶^たん^た抑^{おさ}へ^りぬ^はる^るや^あか^らか^ら
か^ら依^よる^るに^あれ^るに^あ見^みる^る

本曾路名詞圖會卷之二終

本卷三十一

